

小平市教育委員会議事録

——8月臨時会——

令和元年8月8日（木）

開 催 日 時 令和元年8月8日(木) 午後2時00分～午後6時38分
開 催 場 所 大会議室
出 席 委 員 古川正之 教育長
森井良子 教育長職務代理者
高槻成紀 委員
三町章 委員
山口有紀子 委員
説明のための出席者 齊藤豊 教育部長
国富尊 教育指導担当部長兼指導課長
余語聡 教育総務課長
荒木忍 教育施策推進担当課長
岡村由美子 指導課長補佐
中村和哉 指導主事
小影俊一 指導主事
書 記 山本真由美 教育総務課長補佐
傍 聴 者 24名

午後2時00分 開会

(開会宣言)

○古川教育長

ただいまから教育委員会8月臨時会を開会いたします。

傍聴者の方にお伝えいたします。

入り口でお渡しいたしました傍聴券の裏面に注意事項が記してありますので、ご了解の上、傍聴中は静粛にさせていただき、円滑な会議の進行にご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

(署名委員)

○古川教育長

それでは、はじめに、議事録署名委員の指名を行います。

本日の議事録署名委員は、高槻委員、及び私、古川でございます。

(協議事項)

○古川教育長

それでは協議事項を行います。

協議事項、令和2年度から令和5年度使用小学校教科用図書についてを議題といたします。
はじめに、本年度の小学校教科用図書の採択について、これまでの経緯の説明をお願いいたします。

○国富教育指導担当部長

小学校教科用図書の採択について、これまでの経緯をご報告いたします。

本年4月18日の教育委員会定例会におきまして、令和2年度使用小学校教科用図書採択方針、平成31年度小平市立小学校教科用図書採択要領及び同細則を定め、これに基づきまして、5月7日に学識経験者、保護者代表、小学校長、副校長で構成される小平市立小学校教科用図書審議委員会及び同審議委員会の下部組織であります教科用図書調査部会を設置し、委員の委嘱をいたしました。

同調査部会では、全ての検定済みの教科書について、教科、種目、発行者ごとに専門的な調査研究を行い、調査資料をまとめ、6月10日に同審議委員会に提出いたしました。

また、6月1日から7月1日までの間、市内6館の図書館におきまして、教科用図書の見本本を展示し、あわせて市民の方々を対象としたアンケートを実施し、ご意見等を寄せていただきました。各学校におきましても、各教科書の調査研究を行い、その結果を報告書としてまとめ、同審議委員会に提出いたしました。同審議委員会からは、これらの資料をもとに検討を重ね、まとめたものを同調査報告書として、7月18日に教育委員会に提出いただきました。

なお、教育委員の皆様には、同審議委員会からの報告書のほか、各学校における調査研究報告、各教科書発行者の教科書趣意書、東京都教育委員会が作成した調査研究資料、図書館で実施したアンケートの写しをお渡ししているところでございます。これらの資料もあわせてご参照いただき、ご協議いただきたいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、今年度採択する小学校教科用図書につきましては、11教科、13種目でございます。

協議の手順といたしましては、本日は種目ごとに、国語、書写、社会、地図、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭、保健、英語、道徳の順に委員の皆様からご意見をいただき、採択を決定する議案に載せる教科用図書の候補を2者から3者程度に選定いたします。

8月15日の教育委員会定例会では、さらに候補を1者に絞り込み、協議終了後に議案を作成し、審議する予定でございます。

それでは、小学校教科用図書の見本本も用意されておりますので、適宜ご参照いただき、また、既に7月定例会で報告をいただいております「小平市立小学校教科用図書審議委員会報告」についても参考にご協議願います。

進行状況にもよりますが、協議する内容が非常に多いですので、生活の協議に移る前あたりで、

1 回休憩をとりたいと存じます。

なお、平成 29 年 3 月に学習指導要領が告示されました。それに伴い、教科用図書の内容が変更になっておりますので、教科ごとの協議に入る前に、学習指導要領の改訂ポイントについて、事務局より説明をお願いいたします。

それでは、初めに、国語について説明をお願いします。

○国富教育指導担当部長

それでは、国語について説明をいたします。

国語科は、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することが目標に示されています。また、国語を通して育成を目指す資質・能力を、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力」の三つの柱で整理しています。育成する資質・能力の具体的な内容は、「知識及び技能」については、日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにすること、「思考力・判断力・表現力等」については、日常生活における人とのかかわりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養うこと、「学びに向かう力等」については、言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うこととございます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、国語の協議に入ります。国語につきましても、発行者 4 者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい国語」、学校図書が「みんなと学ぶ小学校国語」、教育出版が「ひろがる言葉小学国語」、光村図書出版が「国語」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたか発言をお願いいたします。

○森井教育長職務代理者

ただいまご説明にもありましたけれども、学習指導要領の国語科の改訂の趣旨は、語彙は全ての教科等における資質、能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素であり、語彙を豊かにする指導の改善等、充実を図ることを初め、学習の系統性の重視や読書指導の改善や充実などが示されています。

また、学年ごとに知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、そして、学びに向かう力、人間性等が目標として定められており、その上で話すこと、聞くこと、書くこと、読むこと、それぞれの言語活動が十分行われるような教材を選定することが求められています。

平成 30 年度、全国学力・学習状況調査の結果は、小平の子どもたちの国語における平均正答率は、昨年度の 6 年生の結果ではありますが、国語 A、B ともに全国及び東京都の平均正答率を上回っていました。小平の子どもたちや教員、学校が日々頑張っていることが数字にもあらわれ

ていることは、大変喜ばしいことであると思っています。

国語の教科書には文章の読解と、その中から必要な情報を読み取り、それを整理し、自分の考えを記述する力を培うことが求められると思います。また、小平市立図書館でいただいたアンケートでは、子どもたちが扱う内容として、親しみやすく感動的で文学性の高いものを望む声もいただいております。そして、市立小学校各校から提出された調査報告、並びに教科用図書審議委員会からの調査報告書の内容も考慮して、4者の教科書を見せていただきました。

私の考える児童にとってよい教科書とは、写真や挿絵がわかりやすく、適切な字の大きさや余白のあることで、紙面がすっきり見やすいこと。学年に応じた内容と、物語文や説明文等が興味の持てる内容であることです。また、教える教員にとっては児童を授業にスムーズに導く導入があること。指導の順序がわかりやすいこと。指導に生かせる教材や資料が充実していること。そして、児童の読書を進めるのに役立つといった点も重要であると考えます。

まず扱われている文学的な文章について、例えば4者ともに扱われている「スイミー」ですが、4者中2者が1年下、それ以外の2者が2年上に掲載されています。物語の内容を理解して粗筋をまとめることや協力することの大切さを学べるこの教材を、1年生で学ぶのは難しいのではないかと感じています。

また、市民アンケートでもよい作品であるとの意見のあった4年上の「一つの花」は、私も好きな作品ですし、場面の様子を比べることや題名の意味を考えさせる教材としても優れていると思いますが、4者中1者は資料として掲載されています。

ほかに4者とも扱っている1年の「おおきなかぶ」、4年の「ごんぎつね」、5年の「大造じいさんとガン」を初め、どの出版社の文学的な文章も、内容、挿絵等もすばらしく、児童にとって興味関心をひきつけるものであるなどの感想を持ちました。

各者ともにノートの取り方や、見通しがもてる構成、学習の手引など、児童にとってスムーズに学習が進められるだけでなく、既習事項の整理や振り返り、上級学年への系統を意識した工夫がなされています。しかし、各者扱っている国語辞典や漢字辞典の使い方については、児童にとってのわかりやすさには差があると感じました。また、学年が上がるにつれて、内容が難解になってくるものや、全体的に文字が小さくなってくるものもあります。

このようなことから、私としては小平の子どもたちには、基礎・基本の定着と国語の教科書を通して、読書に親しむ態度を養ってほしいとの思いから、光村図書出版の教科書がいいのではないかと考えます。

光村図書出版の教科書は、東京都教育委員会作成の調査研究資料の総括から、どの分野もまんべんなく扱われており、2年の教科書からは初めに国語の学びを見渡そうとして、学習の進め方や、その学年で学習することを示していること。また季節の言葉のコーナーでは、季節感を感じるとともに、伝統的な言語文化に触れる教材があること。巻末の「言葉のたから箱」は、豊富な語彙の習得を助ける内容となっております。

1年下の巻末のページに、1年になってあなたが頑張ったことは何ですか。自分に表彰状を送りましょうとして、表彰状が載っているのは、児童にとってうれしいページであり、こういうこ

とが児童の自己肯定感や学習意欲を高めることにつながるのではないかと思います。

以上のことから、光村図書の教科書が妥当であると考えましたが、他者の教科書も優れている点が多く、選定には大変迷うところでありました。委員の皆様、それぞれの視点からのご意見を伺わせていただきたいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方いかがでしょうか。

○三町委員

今回の学習指導要領の改訂との関係で考えると、学び方や学ばせ方を意識して編集しているかを見ていかなければいけないと私は理解しております。

学習過程がはっきりしている、考え方をどのように形成させている、そういう流れはどうなっているのか、いわゆるアクティブラーニングの視点からどうかということ。目次の扱い、各単元での学び方や学ばせ方など、それから、今回、低学年に言葉の豊かさに関する指導事項が追加されているということなので、昔話とか神話の伝承の読み聞かせも出てきています。そういった題材の扱い方、それから実際に学習していく上で、国語のノートをどう作ってあげればいいのかという示唆の仕方。また、ローマ字を習いますので、5年生から事実上英語を学ぶ関連はどうなっているか。そういう視点で見えてきました。

重さについて、5、6年の分冊か、1冊かという意味では若干影響が出るかと思いましたがけれども、そういうものも含めて私の場合は見た項目について自分なりにポイントをつけていまして、そのポイントのトータルで各教科を見ています。例えば東京書籍と光村図書は、5、6年は1冊になって、少し重たいのではないかと、そういうところで若干ポイントを下げる仕方をしています。トータルとして、目次の扱い方、目次それぞれについて、何を学ばせるのか、主は読むことなのか書くことなのか、あるいは聞くことなのか明確に示されているもの。それから、その学年で学習する中身の扱い方にも強弱があったように思います。

さらに、目次等から各単元への落とし込みのところの流れの一貫性、これもあえて言うならば、東京書籍は一貫した形になっていると感じました。

そのほか、例えば光村図書では、双葉マークで大切なことを強調しているところ、東京書籍では、言葉の力ということで学びに関して秀でているところを加点していききました。

それから、国語ノートの使い方は、どの教科書会社も書いてありますけれども、東京書籍は4年以降、一貫した形でプリントの作り方をしています。それ以外のところは、例えば光村図書は単元末にノートの例という形を載せているので、それぞれが工夫されていて長短が余りつきませんでした。

それから、英語ブックとの関係で言うと、ローマ字の指導で私たちの頃は補助線が等間隔でしたが、英語科の5年生以降の指導になると、書くときに等間隔ではない形で練習する。東京書籍

と光村図書は、英語教育を意識しての対応になっているので、差があると思いました。

トータルして順位をつけましたところ、一番目が光村図書、二番目が東京書籍です。2者まで挙げさせていただいています。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○山口委員

国語の教科書の性質上、毎日子どもたちが持ち運びをして、目にするということで、子どもたちが興味を持てる内容かどうか、文字量やフォントが適切で、読む意欲を引き出すようになっているかどうか、共感性があり、親しみやすい内容で、日常生活と学習内容がリンクしやすいかどうか、などを念頭に選びました。

本のそれぞれの話に対しての最終的な学習のまとめ方については、それぞれの教科書で特徴があり、一番は光村図書だと思いました。

私は一番に光村図書を推薦いたします。5、6年の教科書が1冊になっていますので、持ち運ぶ子どもの負担を考えると少し厳しいと感じることもありましたが、4年生までが上下巻に分かれているので、重さとしては許容の範囲だと思いました。

先生方やパブリックコメント、報告書からも非常に多い意見でもありましたが、光村図書は扱っている作品がとてもいいと私自身も感じております。例えば高学年では「カレーライス」「やまなし」「時計の時間と心の時間」「海のいのち」など、子どもたちが共感をもてたり、想像力が膨らんだり、心に残って子どもたちがおもしろいと感じ、学びに向かう力が育つのではないかと思えるような作品が、他者よりも多いと感じました。

それと、個人的に光村図書の国語の教科書は、国語と書いてあるところに、1年生の上が「かぎぐるま」、1年生の下が「ともだち、たんぼぼ、赤とんぼ、わかば」と副題がついています。私はこれがすごく奥行きがあっていいと思い、ここも光村図書を選んだポイントの一つであります。

他者も見ましたが、私の中では光村図書が一番という印象を持っております。

○古川教育長

ありがとうございます。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○高槻委員

最初なので全体のことを言います。教科書が、我々の子どもたちとは随分違っていると思います。我々のころは家にそんなに本がなかったし、子どもの持っている本も限られていたから教

科書を繰り返し読みました。今は、むしろ情報過多で、子どもが国語の教科書をどのくらいの頻度で読むのかと思いました。今、情報があふれているので、学校の教科書は情報がある程度限られているほうがいいという、皮肉な感じがあります。

もう一つ、教科書というのは、神聖なもので、落書きしたりすると、すごく親に怒られたので、書き込み欄があると違和感がありました。

国語は、我々の子どもころは要するに書いてある内容そのものを勉強するという感じが強かったのですけれども、今回よくなったと思ったのは、文章をどう書くか、言葉をどう選ぶか、どういう順序で書くかということが勉強できるようになっていることがいいと思いました。

教科書4つのうち、学校図書と教育出版は、情報が多過ぎると感じました。東京書籍と光村図書は甲乙つけがたいのですが、東京書籍は高学年で鷺谷いづみ先生がイースター島のことを書いておられて、地球環境問題というのはすごく重要なので、こういう自然系の教材が割合多く取り上げられていました。それから最後のところに、関連の本の表紙が写真で載っていて、興味があって勉強したいという子は、図書館に行ってそういうのをさらに読めるという工夫もしてあって、よかったと思います。

光村図書も取り上げている文章はいいものが多いと思いました。甲乙つけがたいですけれども、私の中では東京書籍が一番、光村図書が二番です。

○古川教育長

ありがとうございました。

私は学習指導要領に示されている言葉による見方、考え方を働かせ、言語活動を通して国語で正確に理解し、適切に表現する資質、能力を育成することを目指すという目標に活用しやすいのはどれか、という観点で検討いたしました。

その結果、どの学年にも子どもたちの興味関心を惹きつける物語文があるもの、そして、説明文の教材には学習というページがついていて、学び方がよくわかるということで、5、6年が分冊になっていないので、重いのは少し課題かと思ったのですが、私自身も光村図書が一番適切かと思いました。

その結果ですが、委員の皆さんの意見を総合すると、第一候補は光村図書、そして東京書籍の2者に絞り込むということでは、いかがでしょうか。

○三町委員

私は明らかに光村図書が1位で、2位はあえて番号をつけて東京書籍という形ですから、光村図書1本でも構わないと思っています。

○高槻委員

提案としては、今日は二つとして、最終的に一つに絞るということでどうでしょうか。今日一つにしたほうがいいですか。

○古川教育長

1者に絞り込まなければいけないということでの始まりではなかったもので、今日は2者に絞り込んで、次回、光村図書出版と東京書籍で検討していただくということで、いかがでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

それでは、候補は今言いましたとおり、発行者名、光村図書出版、そして東京書籍、この2者にしたいと思いますが、いかがでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

次に、書写に移ります。

書写について、事務局から説明をお願いいたします。

○国富教育指導担当部長

書写につきましては、国語の目標にのっとり、文字を正しく整えて書くことに加えて、書写の学習で身につけた資質・能力を各教科の学習や生活のさまざまな場面で積極的に生かす態度の育成を重視していることとございます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、書写の協議に入ります。書写については、発行者5者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい書写」、学校図書が「みんなと学ぶ小学校書写」、教育出版が「小学書写」、光村図書出版が「書写」、日本文教出版が「小学書写」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと存じますが、どなたか発言をお願いいたします。

○森井教育長職務代理者

書写で求められる知識技能として、文字を書く基礎となる姿勢、筆記具の持ち方、点画や一文字の書き方、筆順から、文字の集まりの書き方、内容を系統的に示し、さらに筆記具を選択し、目的や状況に応じた書き方を判断して書くことが示されています。

また、硬筆は各学年で、毛筆は第三学年より指導を開始し、毛筆の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うような指導が求められています。

このような観点で、東京都教育委員会の教科書調査研究資料を見たところ、総合的に見て、網羅されているのは東京書籍、光村図書、日本文教出版でした。

また6学年を通して、さまざまな筆記具を選び、その特徴を生かして書くことを取り上げているのは東京書籍と教育出版でした。各者ともユニバーサルデザインの視点や、デジタルコンテンツの扱いについては取り入れられており、教科書を見てもお手本となる字体は美しいと感じました。

しかし、教科書の大きさについては、教科用図書審議委員会からの調査報告にもあるように、5者中1者が児童への指導には工夫が必要であるとしています。教科書はお手本として児童の机の上に置かれることとなります。教員の指導はもちろん、児童にとって使いやすさも大切と考えます。1年の教科書を開いたときに、水しよ用紙やシールがあることで、ページが一気に開いてしまう。既習の漢字表などの折り込みページがあるものは、1年生が学習するときには扱いづらいのではないかと感じました。

毛筆の始まる三学年の教科書でも、書くときの姿勢や筆の持ち方について、各者とも丁寧にわかりやすく示してありますが、折り込みページになっているものが多い印象です。各者とも学年が上がるにつれて、手紙の書き方や作成するものにあわせた筆記具の選択など、文字を学習や生活に生かすためのさまざまな情報が盛り込まれています。

これらのことを総合して、私としてはまず書き初めなどは別として、毛筆のお手本が左ページに統一されていて、大きく見やすいこと。そして同じページの右側に目当てや学ばせたい事項や振り返りがあり、必要な情報がはっきりとまとめられていること。また、毛筆と硬筆のバランス等を考慮して、光村図書と日本文教出版の教科書がいいのではないかと考えました。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方いかがでしょうか。

○三町委員

私は書写を見るとき、先ほど説明がありましたけれども、活用指導にかかわっては、新聞づくり、手紙や案内文など、さまざまな形での日常への活用という場面で各者それぞれ工夫されているというところで、こういう点について、ここがというのは言えなかったですが、先ほど言いましたように、特に書写の場合に、学習指導要領の中でもはっきり明記されている中での基礎として、姿勢や筆記具の持ち方を正しくして書くことというのが一つ示されているわけですが、その部分について、硬筆、毛筆の初期指導としての示し方について見ました。

それから、中学年以降ですけれども、漢字や仮名の大きさとか、配列に注意して書くこと、これは基本だと思います。実は私が漢字は大きめで平仮名が小さめに書くとよいと知ったのは30歳を過ぎた頃でした。こういうところをどう扱っているのかということも大事だと思っています。

また、払いなどの筆圧を注意したりすることをどう扱っているかということ。

それから、もう一つはローマ字について見てみました。

まず、姿勢や筆記具の持ち方についてですけれども、もちろんどの教科書にもある程度のページを割いて書いていますけれども、1年生でいうと教室の腰ピン足ペタとか、ぺったんとか、そういうキーワードで示している。小さい子ですから、キーワードでしっかり教えることが大事ということは感じました。

それから、姿勢の中でも、東京書籍だけは足幅についての記述がありませんでした。写真で気になったのは、学校図書の男の子が真っすぐで、書くときは斜めになるのが当たり前ですけれども、モデルとして眺めているとどうなのかという感じがありました。

3年生の筆のときも同じです。それから、合言葉がちゃんと示されているところと、ないところがありました。日文は1年のときは余りはっきりありませんでしたけれども、3年生になってくると合言葉がはっきり出てきます。

ただ、毛筆の初期指導で、丁寧ですけれども、例えば東京書籍だと、左ききの場合はこう置いたほうが良いという写真があって、親切だと思いました。

ここでの扱いで見ると、日文、光村がしっかりとページを割いています。そういう文字初期指導での差もありました。

それから、払いや筆圧にかかわっては、東京書籍は筆圧についてわかりにくいような感じがしました。これは光村とか日文的のほうがわかりやすいと感じました。特に光村の場合、木という字は、左右2ページ使ってしっかりと示していました。

それから、文字の漢字、平仮名の扱い、大きさ、配列に関しては、これは光村だけが文字の配列というのが4年生で、ほかのところは3年生でした。光村は3年生でも扱っているのですけれども、3年の扱いは軽い、そういう差がありました。

私の場合は結果として光村と日文がほぼ同じくらいのポイントで、今の段階では甲乙つけられないので、光村と日文になりました。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方から何かありますか。

○山口委員

私は書写の授業時間は道具を正しく使って心を静めて美しい文字を書くことに集中する時間だと考えました。そのために道具の使い方や文字のお手本に関する情報が適当な分量か、また文字を書くことに集中できる構成かを重要視して選びました。全部の教科書を見せていただいて、前の委員からもお話がありましたが、巻末、巻頭の折り込みページがあることでページ繰りがしにくいと感じる教科書がありました。

またお手本として、毛筆道具などと並べて机上に置くことが難しいと感じるサイズのものもありました。新聞や観察カードなど、たくさんの資料が引用されておりましたが、心を静めて美し

い文字を書くということに集中するということを考えて、少し情報が多いと思われるような教科書もありました。

以上のようなことから、私が推薦しますのは、光村でございます。お手本の写真が多くて、全体的な構成もすっきりしているという点、美しく書くという視点で見たときに、写真の量や解説がちょうどいいという点、あと本を後ろ向きに折ったときに折りやすいというのと、ページをめくる作業がしやすいという点などから、光村が一番適当だと私は思いました。

調査部会や先生方から高学年の情報量が若干多い、教科書が重いなどの指摘もありましたが、書写という科目の性質上、毎日教科書を持ち帰って読むというよりは、お手本や資料集として、必要なときに利用するための教科書であると考えましたので、重さとか情報量は許容の範囲と感じました。

○古川教育長

ありがとうございます。

○高槻委員

字を書くということの意味も時代とともに変わってきていて、これだけパソコンが普及してくると、個人の字のくせを把握できません。学生からメールをもらっても、昔だと彼の字だと、わかったのですけれども、今そういうのがなくなりました。字を書くということ自体も社会の変化とともに変わってきていると思いました。

書写というのは、そういう意味では、東アジア独特かもしれませんが、ユニークなことで、筆で書くというのは大事だと思います。

それででき上がった真っ黒の字と、特に教育出版では、筆の中の動きがリアルで実感としてこういう気持ちで書くといいことがわかるようになっていて、東京書籍と教育出版は、それがうまく書かれていました。

実際に私は子どもの字は、日常的に学校の先生が黒板に書く文字の影響力が大きいと思います。教科書で決まるというよりも先生の方が、影響力が大きいと思いますが、ここは教科書を選ぶ場ですから、字の内側の筆の中での動きを一番うまく表現してあった教育出版が良いと思いました。

実際には字を教える人、そのマナーを教える人、先生の影響力が大きいので、この教科書でないといけないということではありません。どれか一つと言われると教育出版です。

○古川教育長

ありがとうございました。

私は、光村図書出版の書写がいいと思いました。それは全学年が字を書く姿勢のページの写真が大きくてわかりやすいです。全学年とも基礎基本の確実な習得を助ける内容となっている。それから6年に書写ブックというのがあるのですが、1年生から6年生まで習ったことがまとめられています。それが非常に役に立つと思います。

二番目に候補を挙げるとしたら、教育出版です。1年と2年生の鉛筆の持ち方のページがすごくわかりやすいです。それから、硬筆を書き込むスペースが用意されています。ですから、毛筆と硬筆の両方を練習することができるのがすごくいいと思いました。そして、4年生の筆順、字形のところで、左と右の書き方について説明があるのですが、その違いが一番わかりやすかったのは、教育出版です。

そして、レッツトライのページがすごく役に立つので、私としては一番が光村で、二番が教育出版です。

委員の皆さんの意見を統合すると、2者には絞り切れないので、書写については、光村図書出版、日本文教出版、教育出版、この3者でいかがでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

それでは、そう決定させていただきたいと思います。

次に、社会に移ります。社会について、事務局から説明お願いいたします。

○国富教育指導担当部長

社会科は、社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追求したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会を主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することが目標に示されています。

また、社会科を通して目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力」の三つの柱で整理しています。育成する資質・能力の具体的な内容は、「知識及び技能」については、地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに、さまざまな資料や調査活動を通して情報を適切に調べ、まとめる技能を身につけるようにすること、「思考力・判断力・表現力等」については、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会へのかかわり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養うこと、「学びに向かう力等」については、社会的事象について、よりよい社会を考え、主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々とともに生きていくことの大切さについての自覚などを養うこととさせていただきます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、社会の協議に入ります。社会につきましても、発行者3者から見本本の提出がご

いました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい社会」、教育出版が「小学社会」、日本文教出版が「小学社会」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと存じます。どなたかご発言をお願いいたします。

○三町委員

今、説明がありましたけれども、社会科では、問題を追究・解決する活動というところがキーワードだと思っています。そういう意味で、内容的には何を学ばせるかです。その内容についてはどの教科書を見ても大きな差はないと思っていますけれども、学ばせ方、学び方についてを見ました。

それから、小平、東京、あるいは関東など、地域との関連の扱いについての部分も重視をしています。また、6年生は2分冊あったと思います。そういうものについても見てみました。

問題解決的な学習については、どの教科書会社も課題場面を設定して、そこから単元ごとに工夫をして展開していく形になっている。それから、ある単元をちゃんとまとめて、まとめ方まで含めて示されているので、甲乙つけがたかったですけれども、東京書籍が一步抜けている感じがしました。

それぞれまとめ方を記述して、振り返り、日文などは理解シートみたいな形で書いていて、教育出版だと学習問題のまとめとしています。ただ、教育出版のほうが発達性というのがよくまとめの表からは見えなかったと感じました。しかし、6年生の2分冊の使い勝手からすると若干いいのではという思いもあります。

それから、小平との関連で津田梅子さん、玉川上水、平櫛田中でいうと、津田梅子さんについては、3者とも扱っているようですけれども、説明の印象として教育出版は写真そのものが単に留学生の一人というイメージの写真だったのです。東京書籍、日文はその津田梅子さんが出てきているところがあって、説明もしっかりしていると思いました。

玉川上水を扱っているのは、日本文教だけで、内容もかなり充実した扱いだったと思います。さらに、平櫛田中については、もう一か所の生誕地での田中の記念館みたいなものと、両方説明があり、日文だけが強く印象に残っています。

その他のところで私が常に気になったのは、国際問題となっています領土の扱い、示し方、書き方、あるいは表現等を見させていただいて、強弱、長短をつけました。

それから、個人的には、自分の習った当時、社会科の戦後、終戦の扱いの印象は8月15日で平和になって、次に復興だという印象がありました。しかし、そうではないと僕は思っています。8月15日で終わっている書きぶりを見させていただいて、書き方として、その後も例えば、そこで終わっていないわけですから、シベリア抑留などそういうことまでさらに触れているかどうか、そういうところでいうと、教育出版や日文はきちんと扱っている印象がありました。

そういうことでの強弱はありますけれども、一番大きいのは小平市の郷土を愛する心を育てるという意味でいうと、津田梅子さんや玉川上水、平櫛田中の扱いをしっかりしていただいている日文を押すべきという思いです。

○古川教育長

ありがとうございました。

○森井教育長職務代理者

社会科における学習指導要領改訂の主なポイントとして問題解決的な学習の充実、社会的な見方、考え方の学習の充実、社会に見られる現代的な学習課題の学習が示されており、教科書には持続可能な社会づくりについて取り上げられているか、また防災や自然災害における関係機関等の役割について取り上げられているかも重要になると考えます。

私は自然災害についての扱いを重点的に見させていただきました。3者とも4年の教科書で自然災害から命を守る、また自然災害から暮らしを守るとして、学習するようになっています。取り上げられている地域が東京書籍と教育出版が静岡県、日本文教出版は東京都を学習できるようになっています。災害対策を考えるにしても、自分たちの住んでいる東京における取組が教科書で学べることは児童にとっても大変有効であると考えます。

5年では自然災害が多い日本で災害を防ぐことと合わせて、ともに生きるための学習につながっていきます。その中で日本文教出版の教科書には学習資料として、南海トラフ巨大地震が発生する可能性を示していることで、現代的な学習課題につなげることができるのではないかと考えます。

教科用図書審議委員会の調査報告に、先ほど三町委員からもありましたけれども、日本文教出版の教科書には東京都、多摩地区の記述が多くあり、小平にゆかりのある津田梅子や玉川上水、平櫛田中彫刻美術館などについても掲載されているとあることから、小平の子どもたちに興味関心を持って学習に臨んでもらうことが期待できると考えます。

また、3年から社会科が始まるにあたっての導入で、3年生の社会科の学習で大切なことを示し、6年生の巻末で、中学校の社会科ではどんなことを学ぶのかとし、中学校社会科への円滑な系統性を示している点からも、私としては日本文教出版の教科書がよいのではないかと考えます。

○古川教育長

ほかの委員の方は、いかがでしょうか。

○山口委員

私は1冊あたりの重量が非常に重いので、上下巻などで分かれているもののほうが好ましいという側面もあると思うのですが、社会という科目の特性上、歴史や政治経済分野が密接に関係していたり、時間軸をさかのぼって横のつながりを振り返ってみたりと、学習の面から考えると、年間1冊にまとまっているほうが、各分野を横断的につなげやすいかと思います。そうは言っても、やはり1冊の重量がありますから、こちらは教科書を学校に保管しておく置き勉方式ですか、教科書を使う予定がないときには、それを小まめに周知するなど、子どもへの負担軽減の対

策も先生方をお願いした上で、教科書を提案したいと思います。

私が推薦しますのは、日文です。1・2年生で生活科として学んできた内容が3年生から社会科になりますが、その導線がいきなり難しくなり過ぎない構成で、自然に社会科へのステップアップができるというような印象を受けました。

また、特に社会科という科目の特性として、先の委員の方々の話にもありましたが、学習内容が自分たちの生活に密接につながっているということを実感できたときに、子どもたちの学習意欲が大きく高まる教科だと考えております。

その点を踏まえますと、平成26年の広島豪雨から始まり、御嶽山の噴火ですとか、熊本地震のような、比較的新しい災害の事例が多く出ている点、パソコン、スマホの普及で今何ができるようになっていくかという視点が取り上げられている点、また東京都や多摩地区に関する記述が多いのが日文だと思ったので、日文が子どもたちの意欲向上に役立つと感じました。

○古川教育長

ありがとうございました。

○高槻委員

私は社会科を問題解決型に教えるというのはとても難しいことだと思います。例えば理科や算数だと、何をどうすればいいのか、答えも一つで、実験をすれば答えが出るので、考え方としてはシンプルですけれども、災害の問題では、自然災害なのか人災なのかはとても難しいし、大人でもわからないことが多いです。

それで、実際に指導要領でそうなっているとしても、社会科で問題解決型には疑問があります。東京書籍の教科書を見ると、最初にまさに問題解決型のクエスチョンがあり、後でその内容が出てくる。これは少し厳しいだろうと思いました。

日本文教が小平や多摩地区のことを挙げているのは確かです。たまたま小平だから、それが載っているからいいと評価されるかもしれませんが、教科書をつくる側は小平のために書いているわけではありません。教科書をつくる側がどういう教科書をつくらうとしたかを考えると、小平のことが書いてあることはそれほど重要ではありません。ほかの内容がどうであるかというところが大事だと思います。

3冊とも私は驚いたのですが、太平洋戦争が非常に詳しく書いてあるということです。私が中学校のころよりも、もっと詳しいです。今は太平洋戦争という言い方を改める動きがあり、真珠湾の前に既に戦争していたのだからアジア太平洋戦争であると。

私は教育出版が一番いいと思うのですが、真珠湾が始まる前に何があったのか。アジアでどういう戦争を行っていたのかということも書いてあるし、広島原爆以降のこともつながりとして理解させるように書いてありました。

ただ、漫画が出てくるので、私が最初に言った「教科書は神聖である」という基準で言うと、ふざけている印象がありました。ただ、今は全部の教科書がそうなっているので、やむをえない

と思いました。

○古川教育長

ありがとうございました。

私は、日本文教出版の「小学社会」が一番いいと思いました。3年の巻頭に社会科の学習へようこそというところがあって、生活科と社会科のつながりに触れているのがすごくいいと思いました。またイラストや写真で話し合い活動をしている様子が描いてあるので、それも授業の参考になると思いました。それから6年の教科書は私も1冊のほうがいいと思っています。政治単元と歴史単元が一緒になっているほうが学習に活用しやすいと思います。また、歴史の年表が巻末についています。それも非常に使いやすいと思いました。

あと、6年の教科書は160ページと161ページに江戸時代の終わりの様子と、明治時代の東京の様子が載っていて、2枚の絵を比べて、何を感じますか、どんなことを思いますかという教科書の設定になっています。私はこういうふうには社会科はできるだけ資料を厳選して、その中で比較させて、勉強するというのが望ましいと思っています。

ただ、全体的に扱っている地域が姫路市とか福山市など、西日本が多いです。東京から離れた地域なので、子どもたちにとっては少し親しみが弱いというのが課題に思いました。しかし、先ほどからはほかの委員の皆さんが言っているとおり、4年の教科書には玉川上水、小平市平櫛田中彫刻美術館も載っているし、それから6年には津田梅子氏も載っている。そういう意味では小平市にゆかりのある人物が載っているの、子どもたちは確かに親しみを感じると思いました。

ですから、まず一番は日本文教出版、次に挙げるとしたら教育出版です。教育出版は巻頭に社会科の学習の進め方が載っています。単元の学習の流れを理解するのにすごく役に立つと思しました。また、先に学習問題づくりをして、学習の見通しをもって授業を進めていこうというのを感じる内容でした。

また、3年の教科書は、見開きで開くと片方に写真、もう片方にそれと合わせて地図が対応的に載っています。それはすごくいいと思しました。それから、横浜市や品川区、こういうところを扱っているの、子どもたちには割と身近な場所が教材になっていると思しました。

5年の日本の領土に関して、一番詳しく扱っています。それが今の時代、そういうことをきちんと子どもたちに勉強してほしいと思うので、いいと思しました。

ただ、さっき歴史の年表の話をしたのですが、教育出版は真ん中にあります。あれはすごく私は使いづらいと思しました。あと、審議委員会のほうから3年のスーパーマーケットのイラストの中で、口や鼻が描かれていないのがあるとあり、私も人権上の課題があるというので、ひっかかりました。

一番は日本文教出版、二番は教育出版という感じでした。

○高槻委員

私は、そのスーパーの絵のことはうかつでした。6年生を一生懸命読んでいて、気がつかなか

ったので、取り下げてもいいのではないかと思います。

○森井教育長職務代理人

年表が真ん中にあることが使いにくいだろうということや、やはり口や鼻が描かれていない登場人物にも課題があるというような、マイナスだと感じる場所があるのであれば、私としては候補に入れるのはどうかという考えを持ちます。

○古川教育長

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○高槻委員

いいと思います。

○古川教育長

よろしいでしょうか。私も教育出版は取り下げ、候補は日本文教出版1者ということでよろしいでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

次に、地図に移ります。地図について、事務局から説明をお願いいたします。

○国富教育指導担当部長

地図につきましては、社会科の目標にのっとり、地図を効果的に活用し、国土に対する地理的理解や社会生活への理解を深めることを重視していることとさせていただきます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、地図の協議に入ります。地図につきましては、発行者2者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい地図帳」、帝国書院が「楽しく学ぶ小学生の地図帳」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○森井教育長職務代理人

学習指導要領に基づく社会科の目標の一つとして、さまざまな資料や調査活動を通して、情報を適切に調べる、まとめる技能を見つけることを目指すとあります。また学年の目標としては、

3年では身近な地域や市区町村の地理的環境、4年生では自分たちの都道府県、そして5年では我が国と視野を広げ、6年では政治の考え方や仕組みなど、グローバル化する国際社会における我が国の役割について理解を深めるためにも、各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べ、まとめる技能を身につけるようにするとあります。

そのような観点で、発行者2者ということで、見させていただきました。また教科用図書審議委員会からの報告によりますと、両者とも地図の配色や濃淡がはっきりして見やすく、地図ページ以外の資料も充実しているとの所見もあり、またどちらもインターネットを活用した学習ができるよう、デジタルコンテンツも扱っており、甲乙つけがたいところです。

そのような観点も考慮し、まず両者のページを開いてみました。どちらも表紙と1ページ目は袋状になっていますが、帝国書院の地図帳は違和感なくページが開くのに対し、東京書籍のものは表紙と1ページ目が沿わず、表紙に膨らみがあることで、扱いづらさを感じました。

身近な視点から地図への興味関心を持たせる工夫は2者ともされていますが、帝国書院の「地図って何だろう」「地図の約束」「地図帳の使い方」は、初めて地図を扱う3年生にとっては、より丁寧にわかりやすく地図について示されていると感じました。さらに、「トライ！」や「地図マスターへの道」で理解や習熟を図るようなコーナーがあることも資料として、地図以上の活用ができるのではないかと思います。

また、東京都の教科書研究資料によると、掲載されている地図や防災など、目的別の資料の数や統計資料の数が、帝国書院がより多いとの報告に加えて、教科用図書審議委員会からの調査報告の中に資料ページが各学年の指導内容とあっており、学習しやすいとの意見がありました。

以上の点に私個人としても全体の色合い、地図の見やすさ、豊富な資料がわかりやすく掲載されている点も加味し、この地図を通して小平の子どもたちに必要な情報を調べ、まとめる技能を身につけてほしいとの思いから、帝国書院の地図がいいのではないかと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○三町委員

私も帝国書院です。3年生で配付されるということなので、3年生の初期の扱いとして、どちらが使いやすいのかということを見ました。ただ、残念ながら帝国書院のほうは地図の例が大阪の堺市だったということです。東京書籍のほうは小田原を使っています。また、その流れの中での説明等を見ると、やはり内容的にはわかりやすいと思いました。とりわけ小学校3年生で小平の副読本を使うと思いますので、それでフォローすれば済むというようなところが1点です。

それから、先ほど森井委員からもありましたが、個人的に帝国書院の地図は開けてみて見やすい印象を持ちました。平野部と山岳部の色合いでしょうか。これは私の問題かもしれませんが、東京書籍は目がチカチカするので、地図というのは見て読み取るということですから、そ

ういう意味で帝国書院と感じました。

それから、関東地方、東京等の扱いの中で見ると、小平の位置も帝国書院のほうがよくわかるような地図になっているということ。また、社会科のときにも取り上げましたが、領土の扱いです。その記述がどうなっているのか。これは一長一短でしょうけれども、東京書籍のほうは日本とその周りという、領土の扱いのところで日本固有の領土として、北方領土、竹島、尖閣諸島を挙げていて、そして日本の東西南北の端という形で日本を示している。帝国書院は日本の領土とその周りという表現の中で、そのページには領土としての竹島の説明がないので、一瞬あれと思ったのですけれども、別のページの地図の中国地方の1つとして写真と、それから韓国による占拠というような記述でしっかり書かれている。表現として、一瞬どうかと思ったのですけれども、トータルして、帝国書院という結論に達しました。

○古川教育長

ありがとうございました。

○山口委員

先の委員の方からもお話がありましたように、学習目的に則った内容ということで見ると、両者とも一長一短があり、甲乙つけがたいという印象を持ちました。

地図帳が社会科の授業時間にとどまらず、小学校卒業後も何度も見返しているという方も多いのではないかと考えています。そのため、何度も開きたくなる、手にしたくなるという視点で選びました。

私も帝国書院を推薦します。東京書籍に比べて全体的に色調が目になじみやすく、見ていて飽きがこないと思いました。また紙質も若干ではありますが、帝国のほうが手になじみやすく、ページ繰りがしやすいと感じました。また3年生から6年生まで連続して使う教科書なので、表と裏の表紙に加工がされている点が、特別感があっていいと思いました。

以上の点から帝国書院を推薦します。

○古川教育長

ありがとうございました。

○高槻委員

私も帝国書院がいいと思います。見やすいのは子どもの頃に見た地図も帝国書院の地図だったからです。色合いとか、ずっと引き継がれているのだと思います。

東京書籍は、たまたまかもしれませんが、地図のちょうど竹島のところに、災害の写真が貼ってあって、国境がよくわからないのがよくないと思いますので、帝国書院がいいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

私も帝国書院のほうがよいと思いました。巻頭に載っている世界発見というのがすごく見やすく、児童が地図帳に興味関心を持つよう、よく工夫されていると思いました。あと日本の位置がよくわかります。それから地図の約束、地図帳の使い方というのをきちんと初めに教えてあるので、それを初めて使う小学生にとってはすごくわかりやすい。先ほど森井委員からもありましたが、地図の色が、濃淡が薄くできているので、その上に書いてある字が読みやすいです。特に東京都の周りの地図は、小平の位置と形がちゃんと帝国書院はわかります。すごくいいと思いました。

日本の領土のことで、高槻委員が言ったのですが、29、30ページを見ると日本の領土が色分けして描かれています。一目瞭然、ここが日本の領土だと。そんなことを感じる内容でした。

ということで、私も帝国書院がいいと思いました。ということは、5人の意見が一致しましたので、ここは、この1者ということでよろしいでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

それでは、地図の候補は帝国書院1者ということでよろしいでしょうか。

次に、算数に移ります。算数について、事務局から説明をお願いいたします。

○国富教育指導担当部長

算数は、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成することが目標に示されています。また、算数を通して育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力」の三つの柱で整理しています。育成する資質・能力の具体的な内容は、「知識及び技能」については、数学や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質等を理解するとともに、日常の事象を数理的に処理する技能を身につけること、「思考力・判断力・表現力等」については、日常の事象を数理的に捉え、見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質等を見出し、統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を完結・明瞭・的確にあらわしたり目的に応じて柔軟にあらわしたりする力を養うこと、「学びに向かう力」については、数学的活動の楽しさや数学のよさに気づき、学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度、算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養うこととさせていただきます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、算数の協議に入ります。算数につきましては、発行者6者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい算数」、大日本図書が「たのしい算

数」、学校図書が「みんなと学ぶ小学校算数」、教育出版が「小学算数」、新興出版社啓林館が「わくわく算数」、日本文教出版が「小学算数」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○三町委員

算数ですけれども、とりわけ算数の中では子ども自身が学ぶ、どうやって学んでいくのかということを感じさせる。先生にとっては、どう子どもが学べるようにするかという、そういうことがしっかり打ち出されているかが大事だと思います。つまり先ほど説明がありましたけれども、数学的な見方、考え方を働かせ、数学的活動を通して、これは子どもが活動するわけですから、そういう活動ができるような教科書になっているのかということ、これは非常に大きなところだと思っています。

したがって、問題解決的な学習になっているのかどうか。単元の初めの場面設定はどうなっているのか。その画面が、単元を通しての課題追求になっているのか。解決の過程での子どもたちのつぶやきみたいなものの中に、考え方を示唆するような内容があるのか。求め方が複数ある場合のまとめ方は、どういう方向に持っていくのか。そういうことが大きいと思って見ました。

それから、もう一点、文部科学省の学力・学習状況調査の中で、中学校で現学習指導要領から強調されていた「資料の活用」今回は「データの活用」になりますが、その領域から工夫された、とてもよい問題が、中学校3年生に出され続けています。それによって中学校では、かなり統計資料の扱い方、指導も変わってきている認識しています。ところがその内容の一部が、今回小学校6年生においてきているということで、統計資料をどう扱っていくのか、資料をどう活用するのか。これが非常に大きなところになると思います。逆に言うと小学校の先生は、ある程度経験のある先生ほど、当時の中学校での学習体験から、場合によってはその数学的な扱いが十分わかっていないかもしれない、そういう気がします。つまり統計の処理の仕方を教える、教わったという印象が強いのではないかと思います。そうではなくて、そういう資料をもとにして、どうやって読み取って、結論を出していくか。そういうことが強調されているので、しっかりと出されているか。そういう視点で統計分野を見ました。

そこではっきりと強弱が見えてきたところです。まずどの場面でも問題解決的な授業展開がされているか。例えばここで言うと、単元の最初の場面設定で、東京書籍が自然な扱いになっていますし、それから教育出版もそうです。それに対して若干ほかのところはどうかというような扱いで、それが学習課題として次につながっていくような形になっているか、そこで差が出てきています。

それから、つぶやきについては、東京書籍はいっぱい出てきてうるさく感じます。それを教えるのではなくて、その気づきという部分では大事なポイントになっているところでは教育出版が特徴的に見えていました。

それから、1年生で、引き算の指導でブロックを使っている、一般的にもほとんど1年生はブロックを使って、それからだんだんと上がっていけば最終的には数直線という形になっていくの

でしょうけれども、表記の扱い方での差が出ました。

扱い方で二つの方法があった場合に、それをどうまとめるかというところのまとめ方について、示唆する方向としては東京書籍がいいと思いました。

データの活用については明らかにはっきり出たのは、例えば学校図書だと、初めに単元の中の前半の資料の整理という、昔で言う中学校でやっていたようなデータの整理の仕方を学びましょう、それを使って活用しましょうという昔のやり方に近い編集で、こういうのは納得いかなかったです。逆に単元を通した問題解決ということでは、調べる必要感があって、問題解決していく中で、例えば平均値というのはどうだろうか。表で書くとどうなるのか。現地調達方式といえますか、必要感から知識を身につけていく。単元を通しての問題解決ということで言うと、これは東京書籍です。

教育出版もそういう意味での一貫性はあるのですけれども、若干必要感という面では弱い感じがありました。

それから、解決の結果について、自分なりに解釈して、結論を出していく、そういう過程がはっきりした中で、これは東京書籍と教育出版で、次いで学校図書です。学び方とか学ばせ方を明確に打ち出しているのは東京書籍でした。あえて二番目を言うならば、教育出版でした。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方いかがでしょうか。

○森井教育長職務代理者

算数の学習指導要領の改訂のポイントは数学的な見方、考え方の学習の充実と、数や式、表、グラフといった数学的な表現を用いた筋道立った表現の充実が挙げられます。発行者6者の教科書はどれも学習指導要領に基づき、正確、かつ公平であることは各小学校からの調査報告書や審議委員会からの報告書からも明らかです。

そこで採択する基準を小平の子どもたちが学ぶにあたってよりよいということを意識しました。先ほど国語で申し上げました平成30年度に実施された全国学力・学習状況調査の結果から、算数に関しては、当時6年生の小平の児童は全国平均正答率を上回っているものの、評価の観点別正答率のうち、算数Aの「数量、図形についての知識・理解」について、東京都の平均正答率を2.0ポイント下回るという結果でした。

教員の指導力の向上と少人数指導や各小学校での取組が、児童の学力の基礎基本の定着に確実につながっているところですが、さらに既習事項をスパイラルとして高め、課題を解決するために必要な力を育むためには、学年ごとにしっかりと基礎基本の知識と技能を児童に習得させるための内容、手順、まとめと練習問題、発展問題が児童にとってわかりやすい教科書が必要になると考えます。

そういった観点から、私は東京書籍と教育出版の教科書が適しているのではないかと思います。

2者とも1年の教科書では初めて学ぶ算数をわかりやすく、興味関心を持って学習できる工夫が見られます。時計を使った時間の読み方など、身の回りの物と算数を結びつけて考えさせる内容も充実しています。また、たしかめやまとめの問題が充実しており、基礎・基本の習得が図りやすいこと。そしてノートの書き方についても丁寧に扱われていること。そして審議委員会の報告書から、東京書籍では日常事象や生活体験を題材とし、学習意欲を高め、単元の課題を創出できるようになっていることや授業のまとめでは知識や技能だけでなく、数学的活動の中で働かせた見方や考え方を価値づけて掲載しているとの所見があります。

教育出版では単元が習得、活用、探求のサイクルで構成されており、学んだことのよさを実感しながら学習が進められるとの所見が挙げられています。また、編集趣意書には、ユニバーサルデザインフォントの文字を使用することで、全ての児童にとって学びやすい紙面づくりに配慮されているとの記載があり、その点も評価は高いと感じました。

先ほど三町委員からもありましたが、数直線を使って学ぶことは数を視覚的に捉えて学ぶことで児童により理解が図れることから、重要な指導の仕方であると考えます。その視点から、東京書籍では2年上59ページで「数の線を見て答えましょう」の問題から使われており、4年下83、152ページからは2本の数直線で考えられる構成になっています。

教育出版3年上111ページでは、数直線という名称で問題を設定し、132ページでは数直線を使って考える問題、4年上165ページでは2本の数直線の書き方、見方がわかりやすく示されています。

以上のことから、私としては小平の児童の基礎基本の着実な習得と数学的な活動を楽しめる教科書として、東京書籍と教育出版の教科書がよいのではないかと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方いかがでしょうか。

○山口委員

毎日持ち帰るであろうことが想定される算数においては、教科書が軽いのは重要だと考えました。2冊構成だと振り返りがしにくいという意見もありましたが、私は違う印象を持っておりません。実際、子どもたちが学習をするのを見ていると、わからない問題が出てきたときには、先生や友達に直接聞く、算数ドリルなどの副教材の解説やヒントを見るなどしております。教科書をさかのぼって調べていくという作業が子どもたちの中で少なくなってきたので、それならば毎日持ち運ぶ算数の教科書は、上下巻分冊で軽量であるというのは優先順位が高いと思いました。

また、全体的な内容などを見せていただいたときに、例題や作図を教科書に書き込ませるタイプのものもありましたが、これ自体、子どもがやりにくさを感じるのではないかと思います。また、例題や解説の難易度が高く、自分で考えられる算数が得意な子にとっては、おもしろいかもしれませんが、算数が苦手な子には難しい、二分化してしまうのではないかとと思われるような

教科書もありました。また1年生のスタート時点でいい印象を受けていたのが、そこから急ピッチでレベルが上がって、全体として難易度が高くなってしまおうという教科書が見られました。

その中で、私が推薦するのは東京書籍です。各種の報告書やほかの委員の方から既に話が出ておりますように、数直線を多用する解説が私もやはりよいと感じました。また例題や説明に用いている数、数字が小さくて、全体的に非常にバランスがいいという印象を受けております。

さらに1年生の上巻のサイズが大きくなっておりまして、本格的に学習をスタートさせる導入の教材としては、幼稚園の回想から始まり、かわいいキャラクターや大きな記入欄など、非常に有用ではないかと感じました。また他学年では6年生を除いて、上下巻の2冊構成になっているという点からしても、東京書籍を一番で推薦したいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

○高槻委員

指導要領は数学的思考を日常生活の話に応用できるようにつくると思うのですが、実際にはなかなかこれは難しいと思います。「算数は学校でやるもの」ということが現実には多いのと思います。しかし、教科書は、応用を意識して、できるだけそういうふうにつくられていると感じました。ただ、5年生、6年生の問題を実際に自分で見てみると、すごく難しく、量が多くて、これは大変ではないかと思いました。

算数の指導の専門家として三町委員に質問です。私は視覚的な人間ですから、普通のことでもすぐ絵に描いて納得するタイプなので、数直線であらわすというのに賛成するのですが、そういうタイプの人間ではない方もいます。数字が好きで、概念として倍とか3倍がぱっとわかって、別に線に書かなくてもいいということはないでしょうか。

○三町委員

何て答えていいかわからないですが、数学で問題解決したり、空想の世界というのですか、例えば、生活上では2次元のものを3次元まであります。ところが数学の世界はn次元ということで、その世界で考えるわけです。だけれども、それをイメージ化するために、具体的な次元に落とし込んで考えます。同様に数直線をこの場面をこういう形で、すっきりした形であらわして、イメージして問題解決につなげていく、そういう意味での教育的に重要なツールとして考えることが必要です。

○高槻委員

大抵の子どもはそのほうがわかるのでしょうか。

○三町委員

そうです。それをしなくてもできる子というのはすごいです。

○高槻委員

そう思います。10の3乗とかというのは、絵で描くのは難しいけれども、わかる子はわかる。そういう約束事は頭で哲学的に考えるよりも、具体的に書くほうが小学校の算数としては、大多数の子どもがわかりやすい。

○三町委員

基本的に、物との関連づけが、特に小学校だと実際の物と関連づけながら身につけていく。その繰り返しの中で、だんだんと抽象化させていくことだと思います。

○高槻委員

わかりました。そういう意味では学校図書はいいと思います。それとページの中にきちんとおさまっているの、次のページにいくと次の話題というようなすっきり感があったと思います。

ほかのは、どちらかという、ごちゃごちゃしているとか、折り込みがあってわかりにくい感じを受けたので、学校図書が一番よかったと思いました。

○古川教育長

私は東京書籍「新しい算数」がいいと思いました。1年から5年まで上下に分冊になっているというのは、使いやすいと思いました。

それから、山口委員も言いましたけれども、1年の最初がA判になっています。あれは子どもたちが書き込むときも、使いやすいと思いました。各学年の巻頭にある学びの扉、それからマイノートをつくらうが、とても参考になると思いました。自分の考えを式だけではなく、言葉で書いているというのが、これはとても大切なことだと思います。それから、子どもたちが理解するのが一番難しいと言われている分数の割算、そのことについて、最初は整数で考え、その後、既習事項の少数で割るときのように、計算できないかともって行って、さらにその計算にあたっては、二人の考え方を紹介しています。そういう扱いをしているということで、私は東京書籍がいいと思いました。

今、委員の皆様の意見を伺うと、東京書籍、教育出版、学校図書は高槻委員、ぜひもう一回検討したいというところでしょうか。

○高槻委員

そんなに、白黒というほどではないです。

○古川教育長

それでは、2者に絞ってもいいですか。それとも、3者にしますか。

○三町委員

とりあえず2者出すならば自分なりの順番で、東京書籍と2者出したので、東京書籍だけという考えでもあります。算数については、私は東京書籍が一番いいと思っています。

○古川教育長

森井委員、いかがでしょうか。

○森井教育長職務代理者

私も一番は東京書籍がいいと思っています。1年生の教科書が分冊になっていて子どもたちにわかりやすく、算数という教科を学ぶにあたって、違和感なく取り組める教材になっているという点からも、東京書籍を候補にしたいと思います。

○古川教育長

高槻委員、いかがでしょうか。

○高槻委員

いいと思います。

○古川教育長

わかりました。では、皆様のご意見を伺って、算数は東京書籍ということでよろしいでしょうか。

— 異議なしの声あり —

○古川教育長

次に、理科に移りたいと思います。理科について、事務局から説明をお願いします。

○国富教育指導担当部長

理科は、自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成することが目標に示されています。また、理科を通して育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力」の三つの柱で整理しています。

育成する資質・能力の具体的な内容は、「知識及び技能」については、自然の事物・現象についての理解を図り、観察・実験等に関する基本的な技能を身につけるようにすること、「思考力・判断力・表現力等」については、観察・実験等を行い、問題解決の力を養うこと、「学びに

向かう力」については、自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養うことでございます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、理科の協議に入ります。

○森井教育長職務代理者

皆様のご意見を伺う前に、事務局に2点質問させていただきたいことがあります。審議委員会からの報告の中に、5年生の単元配列のことについて記載されているものがありました。1者だけが物の溶け方についての配列が違っているとのことですが、このことに関して何か支障があるのかということについて伺いたいのが、まず1点。それと、教科用図書に関するアンケートのご意見の中にプログラムに関しての記述のあるセンサーについてですが、使用の有無によって、学ぶ子どもたちに不利益が生じるというような内容でしたが、このことについても、ご説明をいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○古川教育長

物の溶け方の単元が後ろに入っているということですか。

○森井教育長職務代理者

最後に入っているところが1者あるのですが、配列が違うことで、何か学ぶ上で支障があるのでしょうか。

○古川教育長

もう一点は、プログラミング教育でしょうか。

○森井教育長職務代理者

そうです。プログラムに関しての記述の中でセンサーを使う、使わないということに関して、子どもたちに不利益が生じるのではないかというような記載があったと思うのですが、このことについて、ご説明をいただきたいということです。よろしくをお願いします。

○中村指導主事

まず、単元配列についてでございますが、調査部会からは、児童の学習に特に影響があるということではないと伺っております。

5年生の理科は植物の発芽と成長、めだかの誕生と成長、台風等の内容を取り扱うため、各教科書時期に応じた指導ができるように、生命、地球に関する内容を春、秋に配列しております。

また一方で、物質、エネルギーに関する内容は、2学期以降を中心に配列する中で、多くの教科書では比較的早期に物の溶け方を配列しておりますが、教育出版は最後に配列していることが特徴となっており、その点が資料の中で挙がっております。

○古川教育長

一つの特徴で、課題として挙がっているわけではないということで、わかりました。

○中村指導主事

プログラミングに関して申し上げます。結論を申し上げますと、履修漏れになるということはありません。各教科書が文部科学省の教科用図書検定を経ており、同検定は平成29年8月10日文部科学省の告示第155号により学習指導要領に示す教科及び学年分野の目標、内容、そして内容の取扱いに示す事項を不足なく取り扱っているということ、また、教科固有の条件として、理科においてプログラミングを体験しながら、論理的思考力を身につけるための学習活動を学習指導要領に示す内容と関連づけながら、取り上げることといった基準によるものとなっております。

ここで指摘のあったセンサーを使った学習活動は、小学校の学習指導要領の解説の理科編において、あくまで例示として示されたものです。

○古川教育長

扱っていないこと自体が問題だということではないということでしょうか。

○中村指導主事

はい、そうです。

○古川教育長

わかりました。よろしいでしょうか。

○森井教育長職務代理者

わかりました。ありがとうございます。

○古川教育長

理科につきましては、発行者5者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい理科」、大日本図書が「たのしい理科」、学校図書が「みんなと学ぶ小学校理科」、教育出版が「未来をひらく小学理科」、新興出版社啓林館が「わくわく理科」となっております。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと存じます。どなたかご発言をお願いいたします。

○高槻委員

自分自身が生物学の科学教育をしている者として、教科書を見させてもらいました。教育指導要領の中で自然科学的な知識をもとに思考力を育てるということで、それは全く正しいのですが、自然科学の教育をするときに、知識を与えるということと、それに基づいて論理的・合理的なものの考え方をするというバランスが大事です。我々の子ども時代は、理科は暗記ものでした。それが、考え方が大事だということで、つくろうとしてあるのですが、それが行き過ぎると、子どもはかなり当惑します。実験室でやる物理・化学実験だと割とすっきりと答えが出ますが、生物や地学では、現象を把握する前に知識を教える必要があります。そこの難しさをどう教科書がつくっていくかという見方で眺めました。

啓林館と大日本は、実は誘導的なので答えが分かってしまうので、考える訓練をしているようで、実は余りできていないという印象が強かったです。

東京書籍は、箇条書きに書いてあるので、教科書としては余りよくないように思いました。

教育出版の場合は、全体の流れが余りよくないので、続けて読んでいくときに、唐突感が何回かありました。

全体としては、学校図書が一番いいと思いました。設問もあるし、それから生物のところは知識を十分に教えて、それから考えるというように順序立ててありました。それから、表紙のすぐれた科学者の肖像画と自然現象とがうまくレイアウトされていて、いいと思いました。

○古川教育長

ありがとうございます。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○三町委員

理科も問題解決的な教科だと思っています。そういう意味での教科書の視線というのか、理科の学び方について、どう子どもたちに伝えようとしているのか。学年で、例えば6年なら6年で学ぶことを、どんな示し方をしているのか。特に栽培関連でいうと、学ぶための準備もどんな扱いになっているのか。また安全配慮はどうされているのか。あと、実際に単元の扱いについて、6年の燃焼についてというところを見ました。これも結果としてはポイント制ですけども、見ていきました。

理科の学び方について子どもたちへの伝え方として、東京書籍、大日本図書、啓林館は、課題をわかりやすく子どもたちに伝えているという印象を持ちました。

また、その学年で学ぶことで、6年を見たのですけれども、ここでは東京書籍と大日本が子どもたちへの伝え方としてはしっかりしていると思ったところです。

それから、学ぶ準備としての、6年の最後のほうで、ジャガイモの扱いを見ると大日本のほうがいいと思いました。

安全配慮については、それぞれの工夫があって、甲乙つけがたいので、同じくらいになってしまいました。

6年生の燃焼で、単元の導入の仕方は、大日本はあっさりしていると思いました。それから、東京書籍はマンガでの会話がうるさく感じました。そういう特徴が出てきていると思いました。ただ、写真等は判も大きいせいもあって、絵とか写真では東京書籍が見やすいと思いました。大日本は大小必要に応じてうまくバランスとっています。

それから、検知管についての扱いで、しっかりしているのは1ページとったのが啓林館です。そのほかでは東京書籍が、説明が大きくてわかりやすい。

理科のノートの書き方も東京書籍、啓林館は工夫をしていて見やすいと思いました。

結論として、ほぼ同じくらいだったのが東京書籍と大日本図書で、結果として絞ってみました。

○古川教育長

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○山口委員

教科書サイズがどれも大きいですが、子どもが手に取ったときに感じる重さや扱いにくさ、資料や中身から受ける子どもの印象は、どこの会社のもそれほど大差はないと感じました。社会科と同じですが、教科書1冊あたりの重量が重く、サイズも大きいです。資料集的な性質もある理科の教科書ですが、子どもたちにとっては負担になりますので、その対策もセットで扱っていかねばならないと思いました。

また、理科は実験や観察を通して問題を解決していく教科です。私自身は問題提起や最後のまとめ方が過不足なく適切な分量で行われているかどうかを確認しました。教科書の中には、高槻委員からも先ほど話がありましたが、実験や観察に関して、非常に細かく説明されているものがありました。情報量が若干多いと申しますか、結果やまとめ方が誘導されている感じを受けます。実験はやり方によっては失敗もありますし、そこから失敗の原因や次の対策を考えることも学習であると感じました。必要以上の解説は、学習の広がり进行を妨げるような気がいたしました。

その中で私が推薦いたしますのは、大日本図書です。サイズは小さいですが、軽いわけではありません。ここが少し残念と感じました。プログラミング教育について先生方から取り組みやすいとの意見が出ておりました。プログラミング教育については、知識や指導について不安をお持ちの先生方も少なからずいらっしゃいますから、教科書に指導がしやすいような工夫がなされていると先生方がお感じになっているのは、非常にポイントが高いと思います。実験手順や器具の使い方などの解説もわかりやすく、全体的に先生方が指導しやすい教科書であるという印象を持ちました。また巻末のその学年に習ったことのまとめや、次の学年になったら、5年生になったら、6年生になったらという、次の学年に向けての展望が書いてあるところが私はいいいと思いました。

大日本図書と僅差と申しますか、東京書籍と学校図書も私は非常に気になったのですが、どち

らもサイズが大きくて、重いと感じました。それと、学校図書は、プログラミングの単元でLEDライトを用いているのですが、時代の流れを汲んでプログラミング教育を開始するのに、スタートの時点で扱っている内容が少し古いという気がしました。これでは学習と実生活が子どもたちの中でなかなか結びつきづらいという印象も受けましたので、3者気になりましたが、私の中では大日本図書を推薦したいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

○森井教育長職務代理者

理科の学習指導要領改訂の主なポイントとして、理科の見方、考え方の学習の充実。自然の事象、現象を捉えるための視点や考え方の提示。そして問題解決の過程を通じた学習活動の重視が挙げられています。また、観察、実験を豊富に取り上げていることも重要な視点となります。

今回5者から見本本が提出されています。教科書の第一印象は、大日本図書、学校図書の教科書が子どもたちの興味を引くものなのではないかと思いました。

大日本図書の教科書は目次、理科の学び方、そして教科書の使い方の学習の流れが一定で、学習内容の確かな習得につながるとの審議委員会の調査報告があります。また見やすい紙面と簡潔な文章で児童にとっても、とてもわかりやすい構成になっていると感じました。

学校図書は先ほど高槻委員もおっしゃいましたが、巻頭でそれぞれの学年に科学の芽を育てようというページがあり、理科を学ぶ子どもたちを科学者として扱っているところが、ほかの教科書にないことや、表紙の著名な科学者の写真からアカデミックな印象を受けました。審議委員会の報告にも、実験器具の扱い方やノートの記録の仕方、注意事項がわかりやすく丁寧に掲載されているとありますが、観察や実験が適切に行えることは、理科の授業にとっては大変重要であると考えます。また、文章も簡潔で読みやすいとの報告もありました。

以上の感想から、私としては大日本図書と学校図書の教科書を候補として挙げたいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

私は、大日本図書の「たのしい理科」がいいと思いました。最初に問題が示されていて、その後、予想しようと二人のキャラクターが吹き出しで語りかけているのが、子どもたちにとってはわかりやすいと思いました。

そして、問題、予想、計画、観察実験と学習の流れが一定で、わかりやすくなっています。それから、単元の終わりには、たしかめよう、学んだことを生かそうというページがあって、学習が深まると感じました。あと写真のサイズが大きく鮮明なので、それもすごく見やすいと思いました。巻末に私たちの理科室があるのですが、理科室の決まりがきちんと載っています。安全を重視しているというのが伝わってくると思いました。

それから、3年の教科書の巻末にシールがついていて、それを使って楽しく問題解決的な学習ができそうだと思います。5年の振子の学習は、実験の様子がよくわかります。そういうことを考えると、大日本図書が一番いいと思いました。

それでは、今の委員の皆様のご意見をまとめると、大日本図書、学校図書、東京書籍と3者になりました。

○三町委員

私は、これはあくまでも二つ出す場合、同じくらいだということです。説明を私もしなかったのので、一つはプログラミング教育の件と、あと重さの件です。重さについては、料理秤で計ってみましたけれども、東京書籍と大日本では80グラムくらい違います。東京書籍が重いということがあって、マイナスポイントだと思っていますので、取り下げたいと思っています。

プログラミング教育に関して、学校図書を消したのは、その部分です。山口委員がおっしゃったとおり、これからのプログラミング教育としての題材としてはいかがかということで、対象外にした経緯はございます。その上で改めて2者をとということであれば、もう一回やり直します。

○古川教育長

わかりました。東京書籍は取り下げるとすることで大日本図書と学校図書、2者を残すということよろしいでしょうか。

理科は大日本図書と学校図書、この2者にしたいと存じますが、いかがでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

次は、生活でございますが、冒頭で申し上げたとおり、ここで休憩をとりたいと存じます。4時25分まで休憩をしたいと思います。よろしいでしょうか。

午後4時03分 休憩

午後4時25分 再開

○古川教育長

それでは、休憩前に引き続き、生活から協議を再開いたします。

生活について、事務局から説明を願います。

○国富教育指導担当部長

生活は、具体的な活動や体験を通して身近な生活にかかわる見方、考え方を生かし、自立し生

活を豊かにしていくための資質・能力を育成することが目標に示されています。

また、生活を通して育成を目指す資質・能力を「知識・技能」の基礎、「思考力・判断力、表現力等」の基礎、「学びに向かう力」等の三つの柱で整理しています。育成する資質・能力の具体的目標は、「知識及び技能等」の基礎につきましても、活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらのかかわり等に気づくとともに、生活上必要な習慣や技能を身につけるようにすること、「思考力・判断力・表現力等」の基礎については、身近な人々、社会及び自然を自分とのかかわりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにすること、「学びに向かう力」等については、身近な人々、社会及び自然にみずから働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしようとする態度を養うこととございます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、生活の協議に入ります。生活については、発行者7者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい生活」、大日本図書が「たのしい せいかつ」、学校図書が「みんなとまなぶ しょうがっこう せいかつ」、教育出版が「せいかつ」、光村図書出版が「せいかつ」、新興出版社啓林館が「せいかつ」、日本文教出版が「わたしとせいかつ」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○三町委員

生活ですけれども、私は小学校低学年を教えたことがないので、教科書の選定で本当に悩んだところです。先生がどう使うのかというところが一番悩んだところです。一つは小学校1年生が初めて学ぶ、そして生活科そのものができてまだ二十数年、つまり親御さんの世代の多くはまだ生活科そのものを体験していないこともあるので、まず、各教科書会社の初期指導のページを見ました。その中で、保護者向けに生活科を学ぶ目的は何かという配慮があるのかどうか。それから、初期指導のページのところの内容で、子どもが見て、うまくかかわるのだろうかという視点で見ました。それから、巻末資料、これに書かれているそれぞれの特徴を見て、自分はポイント化したところです。単元内容の扱いにかかわっては、報告書にも書かれていたので、比較しながら自分で納得したものをポイントに入れています。大きさ、重さについては、さほど大きな差はなかったと思います。

保護者向けの配慮としては、特徴的だったのは、東京書籍です。何ページかにわたって、下のところで保護者向けの説明があって、こういうことを学ぶということが意識して表現されていると思いました。ほかは小さく保護者向けに、この教科で学ぶことと書いたところがあったのですが、それでも、そこは圧倒的に東京書籍が秀でていました。

それから、内容として、わくわく感を感じるというのが東京書籍や啓林館でした。初期では学

校探検のようなところでは、校長先生が出過ぎている記述があつて、僕は嫌だと正直思いました。逆に校長室という紹介の中で、校長先生の顔が余り写らないような形で配慮しているのもあり、そこで差がつかしました。巻末で言うと、それぞれ活動メディケーション、学習道具箱、学び方図鑑、キーワードはそれぞれですけれども、充実していると思いました。特に日文でしかなかったのですけれども、いいと思ったのは雑巾の絞り方、写真もあつたりして、そういうのをちゃんと写真で載せているところが特徴的でした。靴ひもの結び方、展示もありました。巻末の資料として充実していると感じました。

単元での扱いの中で植物の成長にかかわるといふのは東京書籍の成長の連続性とページをずらすとよくわかります。さらに日文も成長がわかるような、折って開くと、成長が一度に見られるような形で、これも東京書籍と日文が工夫されていると感じております。

2者に絞り込もうと、東京書籍と日文を出しました。

○古川教育長

ありがとうございます。

それでは、ほかの委員の方いかがでしょうか。

○森井教育長職務代理者

生活科の学習指導要領の改訂の主なポイントとして、身近な生活に関する見方、考え方を生かす具体的な活動の体験の重視。そして、見つける、比べる、例える、試す、見通す、工夫するなどの多様な学習活動の重視。また、入学当初において、生活科を中心とした効果的・関連的な指導などの工夫、スタートカリキュラムを行うことを明示したことが挙げられます。

見本本が提出されている7者とも、児童が五感を働かせ、いろいろなものを発見する活動を行い、学習カードにまとめることや、さまざまな遊びを通して体験活動を豊かにできる内容になっていると思います。

また、学校たんけんや町たんけんの学習から、さまざまな人との交流活動を行い、自分の学校や住んでいる町をより理解することで、自分のよさや成長についての気づきの例も挙げられています。

審議委員会からの報告でも、ほとんどの内容項目で、それぞれの出版社の学びを深めるための工夫や活用できる巻末資料についての所見があり、児童の学びやすさと教員にとっての指導のしやすさを挙げています。

その中で東京書籍は、東京都教育委員会の調査研究資料によると、安全に関する内容を取り上げている箇所が242か所と見本本提出7者のうちで最も多いとのこと。教材の内容として、防犯・防災を多く取り上げているのは日本文教出版の教科書であるとのこと。児童を取り巻く社会の急激な変化に対応するためにも、低学年のうちから安全に関する内容に重点を置くことは大切であると考えます。

また、改訂の主なポイントでありましたスタートカリキュラムを意識した内容を東京書籍と大

日本図書は、どちらも上巻で示しています。学校図書では、観察カードや記録カードなどの学習カードの例が随所にあることで、表現活動の参考となります。「ものしりのうと」は活動の具体例ややり方がわかりやすく示されていることや、児童が主体的・発展的に学ぶ工夫がなされているとの所見もあり、大人の私が見ても楽しいと感じる教科書でもあります。光村図書は、吹き出しや観察カードの例示が多く、児童の視点に立った感じ方や考え方がわかりやすく構成されており、学校での生活の流れ、四季の移り変わりなどに配慮した配列となっているとの所見もあります。見やすい紙面と写真や絵が大きいことで、児童の興味・関心を引きつける魅力のある教科書であるとの感想を持ちました。啓林館は「すたあとぶっく」として、導入の部分に16ページを割り、児童の主体的な学びにつなげる工夫がなされています。観察カードやワークシートの例が多数掲載されており、指導の参考になるとの所見があります。児童の気づきを引き出したり、学習への意欲を高めたりできる工夫もあるとの報告もあり、他教科との関連づけや3学年以降への円滑な接続につなげることを意識した教科書として評価は高い印象です。

このようにどの教科書も大変すばらしく甲乙つけがたいところではありますが、1年生の児童にとって生活科の教科書は、自分の目で見て、自分の感覚で感じて、気づいたり、考えたりする学習を進めることが重要であると考えます。児童の生き生きとした表情の写真が多く使われており、ページをめくるときのわくわく感や季節感のある紙面構成で、児童が体験活動を通して気づきを大切にできるような工夫があり、児童の興味・関心を想起させるという点から、私は東京書籍、大日本図書、学校図書の教科書を候補として挙げたいと考えますが、先ほど申し上げたとおり、迷っているところでございますので、ほかの委員の皆様からのご意見も参考にさせていただいた上で、さらに候補を絞ることができればと考えています。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方いかがでしょうか。

○山口委員

私は7者全部拝見しまして、大きな特徴は特に見られなかった科目、大きな差異が見られなかった科目と感じております。その中で私が重視しましたのは、学びの自由さです。生活は自由な発想を伸ばしたり深めたりする科目だと、私自身は捉えておりますので、正解例を数多く示して、観察カードはこう書くべきのような誘導が多過ぎるものは好ましくないと思いました。

7者全て見せていただいて、正しい回答例を教科書で多く提示し過ぎていると感じるものがありました。また、最後のまとめのところで、まとめ方を誘導している、自由な発想を伸ばしていくのに邪魔だと感じるものが出てくるような教科書もありました。また、学校の先生からも指摘があったところですが、視点の導線が複雑で、1、2年生には迫うのが難しいと感じるようなところもありました。

以上のようなところを考慮しまして、私は東京書籍を一番に推薦いたします。東京書籍は、サ

イズが大きいのですが、軽くできておりました。森井委員から話があったとおり、掲載されている写真の子どもたちの表情が7者の中で一番いいと感じました。全体から受ける印象がとても楽しそうで、やはり、わくわくするだろうと考えました。また、三町委員からのお話がありましたように、生活が科目としてなかった親の世代から見ると、1、2年生の教科書に生活の学習内容を保護者と共有できるような工夫があるのはいいと感じました。また、報告書などでもありましたが、黒板の上にホワイトボードを貼っている絵が小平市の小学校で取り組んでいる事例と同じですので、子どもたちはここに非常に親近感を持つのではないかということを感じました。日本文教出版の、三町委員からお話がありました雑巾の絞り方ですとか、触れる展示については、私も非常にいいと感じました。日本文教出版は本も軽量ですし、写真の構図がほかのところと比べて少し独特で、これもおもしろいという印象を受けました。

したがって、私は、一番が東京書籍、二番が日本文教出版の2冊を推薦させていただきます。

○古川教育長

ありがとうございました。

○高槻委員

生活は、恐らく教える先生の力量が、非常に比重が大きい教科と察します。教科書そのものは私も似たり寄ったりで、突出していいものとか、よくないものというの見出だせませんでした。

具体的な体験を重視するということから言うと、学校の季節、春、夏、秋、冬でどう変化していくか。木のイラストや写真を通して1年、季節が移って行って、子どもたちも成長しながら、入学したときはサクラが咲いていたけれども、季節ごとに変化をすることを見ることができると思います。先生の力量によっては、いろんな雑草の名前、昆虫、それを教えられないこともあるでしょうから、頑張ってもらいたいと思います。

教科書としては、そんなに違いはないと思いました。啓林館と学校図書は、植物図鑑が載っていて、よく身近に見かけるオオイヌノフグリなどがありました。よく見るけど名前がわからない場合に、それはこういう名前なのだ、自然に親しむきっかけになります。具体性と、算数のような抽象的な科目の中に、具体性のあるものを入れたいというのが、意図として生活科にあると思うので、啓林館と学校図書は自然を学ぶという意味で優れた方法が載っているのでもいいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

私は、学習指導要領の中にある活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらのかかわり等に気づくという観点で検討しました。その結果、東京書籍と学校図書の2者がよいと思いました。

東京書籍の巻頭は、スタートカリキュラムのページとなっており、幼稚園や保育園と小学校の

接続をスムーズにしようという考えがわかります。それから、保護者の皆様へというコメントは、保護者と理解共有を図ろうとしていることが伝わってきます。サイズがA判で、写真やイラストが大きく見やすいというのも、いい点だと思いました。イラストの吹き出しを見ると、どのように学習を進めていけばよいのかがわかります。あと、実物大の動植物を掲載したポケット図鑑、これはとても便利だと思いました。ただ、課題としては、実は116ページに、避難時のときの約束が「おはしも」となっています。押さない、走らない、しゃべらない、戻らない、実は小平市で指導しているのは「おかしも」です。押さない、かけない。そうすると、1年生の子どもが混乱する可能性があるというのは、気になりました。それから、学校動物飼育を小平市としては進めているのですが、それに関するページが2ページありません。そこがひっかかりました。

あと、学校図書は、目次のページを見ると、1年間の学習の流れが年表のようにわかるようになっていきます。巻頭には、スタートカリキュラムが載っていますので、先ほどの東京書籍と同じように幼児教育からスムーズに移行ができる。また、写真も大きくて、子どもの興味、関心を高めることができる。教科書の左側のページの上に「ドキドキ、生き生き、ふむふむ、にこにこ」と書かれてあって、単元の学習の流れがつかみやすいようになっています。あと、巻末にある学び方図鑑、これは非常に子どもたちの主体的な学習を進め、発展的な学習につながると思いました。ただ、実は学校動物飼育に関しては10ページあります。それと同じように、全体量の分量が多いです。内容は精選されているのですが、教師が資料として使うという発想だったら、すごくいいと思います。そういうところがひっかかって、東京書籍と学校図書、どちらが一番かというのは、私は決めかねたというのが本音です。

今の委員の皆様のお話を聞くと、東京書籍、学校図書、日本文教出版でしょうか。

○高槻委員

啓林館はいいです。そんなにではありません。

○古川教育長

3者でいいでしょうか。それとも東京書籍、学校図書、この2者でよろしいでしょうか。

○森井教育長職務代理者

ただいま教育長のおっしゃったように、小平市が進めているものと違うものが掲載されているということに関して、内容的には指導する上で問題ないのでしょうか。

○古川教育長

質問ですか。

○森井教育長職務代理者

はい。事務局に質問です。

○国富教育指導担当部長

「走る」と「かける」というのは、意味合いは同じなので、その意味では、きちんと意味を説明すれば大丈夫です。発達の段階で1年生が「走る」と「かける」をどう捉えるかということで、その留意をきちんと踏まえた上で指導すれば、特段問題はないと考えます。

○森井教育長職務代理者

そうであれば、子どもたちの生き生きした表情が多く扱われていることから子どもたちにとってもよい教科書なのではないかという感想を持っておりますので、東京書籍を候補として残してもらいたいと思いました。

○古川教育長

日本文教出版についてはいかがでしょうか。

○三町委員

学校図書は、もともとポイントが低いですから、残すとして学校図書を残すという印象は弱いです。

○古川教育長

生活に関しては、東京書籍、学校図書、日本文教出版の3者ということで、よろしいでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

それでは、そうさせていただきます。

次に、音楽に移ります。

音楽について、事務局から説明をお願いします。

○国富教育指導担当部長

音楽は、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かにかかわる資質・能力を育成することが目標に示されています。

また、音楽を通して育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力」等の三つの柱で整理しています。育成する資質・能力の具体的な目標は、「知識及び技能」については、曲想と音楽の構造等とのかかわりについて理解するとともに、あらわしたい音楽表現をするために必要な技能を身につけるようにすること、「思考力・判断力・

表現力等」については、音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聞くことができるようにすること、「学びに向かう力」等については、音楽活動の楽しさや体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培うこととございます。

○古川教育長

ありがとうございました。

音楽の協議に入ります。音楽につきましては、発行者2者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、教育出版が「小学音楽 音楽のおくりもの」、教育芸術社が「小学生の音楽」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたか発言をお願いいたします。

○高槻委員

二つの教科書ですが、例えば、6年生で比べると、どちらも特に問題はないと思いました。楽譜があるので、判の大きい教育出版は、選ばれている曲も私が好みのものが多かったというのもあって、そちらがいいと思います。

小平の場合は、音楽のレベルが非常に高く、学校の中でいっても、いい指導をしておられるので、教科書プラス先生の指導ということで、どちらも大丈夫と思います。選ぶとすれば教育出版です。

○古川教育長

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○三町委員

2者ということで、どちらかの比較で見えてきました。結論から言いますと、私は教芸のほうがよりいいかと思いました。学び方、学ばせ方、題材や目当てというところで見ると、教芸のほうが題材と目当てについて、二つの比較の中で、わかりやすいというところが自分ではプラスのところではあります。

それから、いわゆる和楽器等、我が国とか小平で言えば、鈴木ばやしではないですけども、そういった音楽科の学習、そういうことも充実するよということになると思います。そこで見ますと、例えば、小学校で琴を弾いてみようというところを見て、写真で見ると、琴は爪が角であったり、丸爪であったり、そういう説明もあるのですが、教育出版は生田流の形の構え、つまり角爪の写真しか載っていない。本来であれば、正面で向かって弾く形と斜めに向かって弾く形とあります。それによって爪の形が違うのですけれども、教芸の場合、両方の写真がちゃんと載っているの、そのほうが先生、あるいはどなたかに来ていただいて、教えてもらう場合に、どちらかの流派のはずですから、両方、教科書には示しておくべきと、これも教芸のほうが進ん

でいるということでした。

今は5年生で篠笛を教育出版が扱っているということで、これはおはやしのこともありますし、それこそ鈴木ばやしにもつながるようなものなので、これはいいと思いました。

それから、鈴木ばやしで言うならば、郷土芸能について一貫して、3ページずついろいろな郷土芸能の写真と説明が入っているということで、小平との関連でも生かせるような教科書になっていると思いました。

それから、最後に、国歌の指導についてです。これも教育出版の場合は、1年から6年まで基本的には、さざれ石の写真、同じような写真と、それから、その説明、あるいは歌詞の説明ということで、1年から6年の発達に余りかかわっていないような、言葉や漢字が多くなるような感じですが、内容的にはそんなに変わっているようには思えません。それに対して教芸のほうは1、2年生、3、4年生、5、6年生によって、国歌に対する物の考え方、あるいは外国の国歌に対する尊重の仕方とか、そういうものが発達に応じて変わってきているので、国歌の正しい理解という意味では教芸のほうが良いと、そういうことで教育芸術社にさせていただきました。

○古川教育長

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○山口委員

音楽は音を楽しむ授業だと考えています。どの本が使いやすいかを考えると、私も教育芸術社を推薦いたします。

まず、ページの構成がすっきりとしていていいと思いました。三町委員からも話がありました題材とか目当てがすっきり書かれているという印象です。また、楽譜が図や線などで視覚的に解説されている部分が多く、譜面の読みが苦手な子も理解がしやすいと思いました。教科書サイズと重さが若干気になったのですが、教科の特性上、学校で保管しておく場合が多く、毎日持ち運びをするものではないので、サイズや重さに関しての問題は音楽の場合にはそれほど気にしなくていいという印象です。

一方で、教育出版ですが、内容が若干高度だと感じております。オーケストラやアンサンブルのスコア譜が多用されておりますし、合唱曲などの楽譜も若干小さめに表示されております。楽譜が読める子どもにとっては、それほど負担はないか、逆に興味を持つお子さんもいらっしゃるかもしれませんが、譜読みが苦手なお子さんにとっては情報が多過ぎて興味がわからないのではと感じました。

以上の点から私は教育芸術社のほうを推薦いたします。

○古川教育長

ありがとうございました。

○森井教育長職務代理者

音楽の学習指導要領改訂のポイントは大きく3点で、1、音楽表現を生み出したり、音楽を聞いてそのよさなどを見出したりするような内容の改善、2、生活や社会の中で音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実、3、和楽器を含む我が国や郷土の音楽の学習の充実とされています。音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図る場面があることも重要です。2者とも児童の興味・関心を引く教材が多く、甲乙つけがたいことから、東京都教育委員会の調査研究資料に示されている数値的な報告と審議委員会からの調査報告書を検討材料として重視させていただきました。

まず、教科書に掲載されている教材数、曲数については2者ほぼ同じで、和楽器を含めた我が国や郷土の伝統音楽の曲数と資料数は総合的に見て教育芸術社が多く、諸外国の音楽の曲数と資料数は教育出版が多いという報告です。ただ、審議委員会からの調査報告で気になる点として、題材名と学習のめあてについての所見が挙げられています。児童にとっても、指導する教員にとっても、学習のめあてがわかりやすく示されていることは、学習を進める上で大切であり、知識や技能の習得には必要なことであると考えます。

教育芸術社の教科書は、題材名が児童にとって何を学ぶのかがわかりやすいとの報告があります。また、文字や楽譜などが児童にとってわかりやすいとの報告もあり、鍵盤ハーモニカやリコーダーの導入、そして楽器を大切にするためのページも丁寧に記されています。学年に応じて歌ったり、楽器を使って演奏したり、言葉のリズムを組み合わせる音楽をつくるなど、児童に音楽を通してのコミュニケーションを図る学習をしっかりと身につけさせる内容であると感じました。加えて全学年に「歌い継ごう日本の歌」があり、1年のお正月や七夕さま。2年のトンプのメガネ、シャボン玉。3年の七つの子にゆりかごの歌。4年のみかんの花咲く丘と背くらべ。5年のちいさい秋みつけたと海。そして6年の夏は来ぬと浜千鳥など、児童に覚えてほしい、歌い継いでもらいたい美しい日本語と親しみのある曲調のいわゆる童謡のページがあることも大変よいと感じ、私としては教育芸術社の教科書を薦めたいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

私は、学習指導要領にある音楽活動の楽しさを体験することを通して音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むという観点で検討いたしました。

教育芸術社の「小学生の音楽」がよいと思いました。巻頭に1年間で学習する内容が載っています。目次を見ると、学習の狙いが見えるようになっていました。それから、鍵盤ハーモニカの説明がとても丁寧です。あわせて、リコーダーの説明も段階的に丁寧に載っており、音楽専科の教員でなくても教えやすいと思いました。子どもたちにとって、魅力的で親しみの持てる楽曲が多く扱われていて、楽しさを感じると思いました。また、先ほど三町委員も話されましたが、国歌「君が代」のページ、教育出版は同じ写真をずっと使っています。芸術社の方はオリンピックの選手の写真を使っていて、我が国の繁栄だけではなく、他の国への敬意と尊重し合うことが大

切だということを教えている、そう感じました。そういう点で教育芸術社のほうがよいと思いました。

○高槻委員

教育芸術社の方がいいですか。

○古川教育長

どうでしょうか。

○高槻委員

いいです。本当にそんなに違いはないと思っています。

○古川教育長

高槻委員のお話もありましたので、音楽は教育芸術社が妥当だと存じますが、よろしいでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

次に、図画工作に移ります。

図画工作について、事務局から説明をお願いいたします。

○国富教育指導担当部長

図画工作は、表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわる資質・能力を育成することが目標に示されています。

また、図画工作を通して育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力」等の三つの柱で整理しています。育成する資質・能力の具体的な目標は、「知識及び技能」については、対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、あらかし方等を工夫して、創造的に使ったりあらかしたりすることができるようにすること、「思考力、判断力、表現力等」については、造形的なよさや美しさ、あらかししたいこと、あらかし方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品等に対する自分の見方や考え方を深めたりすることができるようにすること、「学びに向かう力」等については、つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培うこととございます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、図画工作の協議に入ります。図画工作につきましては、発行者2者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、開隆堂出版が「図画工作」、日本文教出版が「図画工作」となっております。

それでは、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○高槻委員

最後のところの情操を養うということがあって、それが大きいと思います。音楽と共通です。

図工というのは図と工で、図のほうは描いたりする芸術的な精神、工のほうはそれを表現する技術的なことで、両方ないと情操を養うことにつながっていかないと思います。技術を知っていても、美しいと感じる心がなければ、いい育成にはならないので両方必要だと思います。

その面で言うと、どちらの教科書も共通です。工のほうはすごくあって、子どもたちの作品が無数に載っていますけれども、すばらしい芸術作品を見るという意味では非常に乏しくて、どちらかと言えば、日文のほうが古典の絵が少し載っています。開隆堂は、ほとんどなくて、工のほうに著しく比重が偏っていて、すばらしい古典的な絵や芸術家の作品が少な過ぎると思いました。この二つで言えば、日文のほうがいいと思いました。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○森井教育長職務代理者

図画工作では、生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわる資質・能力の一層の重視が学習指導要領改訂のポイントとされ、児童が自分のイメージを持つことや、形や色などの造形的な特徴を捉えたり、考えたりすることを具体的に示しています。

東京都教育委員会の調査資料では、表現の内容別題材数、鑑賞の題材数や作品数とも、ほぼ日本文教出版が数の上では上回っているとされていますが、2者の教科書を開いてみたときの第一印象としては、私は開隆堂がいいのではないかとの感想を持ちました。審議委員会の調査報告書でも、児童が身近で意欲的に取り組める題材、色彩の豊かな題材を発達の段階に応じて設定しており、児童の思いやこだわりを大切にしているとの所見もあり、また、單元ごとに学習の目当てが示されていることと題材と内容とこの単元で使う材料と用具を示していることも、教員にとっても授業が進めやすいと感じました。

しかし、高槻委員のおっしゃったように、鑑賞するための作品は余りなく、日本文教出版では5、6年のゲルニカや、巻頭に掲載されている教科書美術館など、すばらしいものが多い印象を持ちました。また、ひらめきポケットでは、身近にあるものをさわったり、並べたり、つなげたりすることで生まれる新しい発想のヒントが盛り込まれています。巻末の「使ってみよう材料と

用具では、扱い方を写真や絵を使ってわかりやすく説明しており、見やすいと感じました。また、各題材に見つけたり工夫したりすること。感じたり考えたりすること。活動の中で楽しんでいることの三つの「学習のめあて」が示されている点、また、「気をつけよう」「片づけ」が必要に応じて示され、活動の際に特に注意を払うことや、安全面で配慮を要することが児童にとってわかりやすい点も優れていると思いました。作品は、実際に児童がつくっている様子が多く、作品づくりのポイントやヒントになる児童の言葉が掲載されており、児童の感性を働かせながら作り出す喜びを味わうための工夫がなされていると感じました。5、6年の下巻では「中学生になるあなたへ」として、中学生になっても、大人になっても、作り出す喜び、人や社会とかかわる喜びなどがつながっていくのだというメッセージがあることもすばらしいと感じました。

以上のことから、甲乙つけがたいところではありますが、第一印象とは変わりますが、私は日本教出版の教科書を小平の子どもたちに使ってほしいと思いました。

○古川教育長

ほかの委員の方、いかがでしょうか。

○三町委員

これも2者なので、比較ということで見ました。報告書の中でも題材の目当て・ねらい、安全上の留意点、形や理解など、学習に必要なポイントが掲載されて、授業の流れがつかみやすいというのが日文の中に取り上げられていました。そういう意味では、そういうところが優れていると思って意図的に見たのですが、題材名はどちらの出版社のも工夫されていて、テーマも大変いいですけども、目当ての表現が私は非常に気になりました。というのは、開隆堂の場合は、何々しようとか、何々を考えようという子どもへの投げかけです。それに対して日文は何々をする、何々を考える、まず、先生にと感じる。これは誰に対して教科書をつくっているのかと思いました。

それから、目当ては三つあるのですが、よく見ると、開隆堂の場合はその中でも重点化していて三つの中で、やや技能面を重視、強調されています。それに対して日文は全部同じ扱いになっています。その後、振り返りになると、開隆堂が目当てに沿った形での振り返りのポイントが与えられています。そういう道具の使い方になれたかなと振り返りになっています。それに対して日文は全て三つ挙げたうちの3番目しか書いていない。それでいいのかと少し疑問に思いました。日文もいいと思ったのですが、考え方を持った編集になっている開隆堂にさせてもらいました。

○古川教育長

ありがとうございました。

○山口委員

ほかの委員の方からお話がありますように、一つ一つの単元で比べますと、どちらも内容的

に大差がなくて、甲乙つけがたい印象の二つでした。ただ、中身を見たときに、日本文教出版の教科書のほうが色合いのコントラストが優しくて、レイアウトもすっきりしているように見えました。サイズが大きな教科書ですので、受ける印象は優しい、レイアウトがすっきりしているというのは、子どもたちにとっては見やすいと感じております。また、児童作品と鑑賞用作品とのバランスがよく、子どもたちが取り組む創作活動が発展していった先に、どのような表現があるのかを鑑賞用の作品を用いてイメージを膨らませるような工夫があるところがいいと感じましたので、私はどちらかという日本文教出版のほうを推薦したいと思います。

○古川教育長

ありがとうございました。

私は、学習指導要領に載っている「つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う」というその観点で検討しました。その結果、日本文教出版の「図画工作」がよいと思いました。それは題材名に工夫があり、子どもたちの興味・関心を高めることができると感じました。それから写真だけではなく、子どもの発言も吹き出しの形で載っているので、よくわかると思いました。それから、一つ一つの題材が見開きのページに大きく紹介されていて、子どもたちがどのような活動をするのか理解しやすくなっているなど感じました。あと、巻末に載っている「使ってみよう材料と用具」の説明がとても丁寧でわかりやすいと感じました。また、高槻委員が話されたように、巻頭や鑑賞のページに芸術家の作品が豊富に紹介されているというのも、これがすごくいいと感じました。

○三町委員

私としましては、どちらがどうということではありませんでした。見ていて、どちらもいいというのは前提です。報告書の中のキーワードで見ると、なぜ教科書を子ども向けに書いているはずなのに、そういう表現をしたのかというところに疑問があったので、これはうまく使っていたら、日文でも構わないと思います。

あと、学習の目当てについても先生がちゃんとしんしゃくして、どこにポイントをおくのか、振り返りはどうさせるのかきちんとしていただければ、日文でいいと思います。

○古川教育長

ほかの委員の方々、よろしいですか。

それでは、図画工作は、日本文教出版が妥当だと存じますが、よろしいでしょうか。

— 異議なしの声あり —

○古川教育長

続いて、家庭に移ります。

家庭について、事務局から説明をお願いいたします。

○国富教育指導担当部長

家庭科は、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住等に関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することが目標に示されています。

また、家庭科を通して育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力」等の三つの柱で整理しています。育成する資質・能力の具体的な目標は、「知識及び技能」については、家族や家庭、衣食住、消費や環境等について、日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身につけるようにすること、「思考力、判断力、表現力等」については、日常生活の中から問題を見出して課題を設定し、さまざまな解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養うこと、「学びに向かう力」等については、家庭生活を大切にすることを育み、家族や地域の人々とのかわり合いを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養うこととでございます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、家庭の協議に入ります。家庭については、発行者2者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい家庭」、開隆堂出版が「小学校 わたしたちの家庭科」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○森井教育長職務代理

家庭における学習指導要領の改訂の要点に小学校家庭科については、「家族、家庭生活」「衣食住の生活」「消費生活と環境」に関する三つの内容で構成し、ほかの内容との関連を図り、実践的な学習活動を一層充実する。さらに、主として日本の生活・文化の大切さに気づく学習活動を充実するとあります。そのような観点で両者の教科書を見比べてみました。

どちらも上で述べた三つの学習内容についてバランスよくまとめられております。しかし、開隆堂の最初のページの「これまでの学習を家庭科につなげよう」や「はじめよう！家庭科」、そして「家庭科学習の進め方」では、考え、実践し、振り返るという学習の進め方を身につけておくことで、これからの生活に役立つ問題解決型の学習を示しています。審議委員会の調査報告には、情報が精選されていて、内容がコンパクトにまとまっている。また、ひと口メモの内容がわかりやすいなど肯定的な意見も多かったです。単元の初めに学習のめあてがきちんと示されていること。また、調理の学習では、安全面での注意点がしっかり示されていること。そして、実際の作業が写真を使って手順を追ってわかりやすく示されていること。また、裁縫の単元ではまち針のとめ方の順番や布の裁ち方、印のつけ方が写真を使ってわかりやすく、きめ細かな説明

のあることも、初めて裁縫に取り組む児童にとって、また担任が家庭科を教えている実態も踏まえて、よりわかりやすいことが大切であると考えます。

126ページの2年間の学習を振り返って、「中学校の学習に生かそう」のページと中学校技術・家庭科「家庭分野」の学習のつながりを示していることも、学習の系統性を児童に示すとともに、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成に寄与するものであると思います。

また、家庭科の目標にもありました「家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を備える」という点から、家庭科の教科書は、学校で学ぶためのものであると同時に、児童がよりよい生活を送るための手助けになるものとしての機能も求められると思います。

開隆堂の教科書は、この1冊があれば、家庭科の基礎・基本がわかる、そして児童にとって手元に置いておきたい愛着の持てる教科書になるのではないかと思います。

○古川教育長

ほかの委員の方は、いかがでしょうか。

○高槻委員

私は家庭科の教科書を読みながら、この教科は絶滅危惧というか、もうなくしたいのではないかと思います。というのは、今、現実に、小学生の子どもをお持ちの家庭の人が、こういう情報をどう得ているかと想像すると、料理であればテレビ、いろんなレシピであればスマホでとれます。だから、実生活の中でのいろんな知識を得るという意味でいったら、小学生の教科書で勉強するというのは、むしろ特殊なことになるだろうし、日進月歩変わっているから、どんどん古くなっていくと思います。

日常生活の中のいろんなノウハウを勉強するというのであれば、なぜ台所系に偏るのか。風呂だってトイレだってあるし、乗り物だって、いろいろあるのに、なんで昔主婦がやっていた内容に限られるのかなど、いろいろ疑問もあります。そういう意味では、この教科そのものの見直しというのは、近い将来あると思いながら見ました。

この二つの教科書で言うと、教科書に情報を盛り込んでいくときりがないので、情報が少ないこと、ページの印象、見やすさも、開隆堂です。ただ、そんなに違いはないと感じています。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○三町委員

2者での比較ということで、高槻委員がおっしゃったように、余り差を感じません。学習の進め方を見ても、東京書籍がステップ1、ステップ2、ステップ3という形で示されていて、ただ、この表現は、考えようとか、何をつくろう、始めようというような表現です。開隆堂は、学習の

めあてが何々に気づく、何々ができる、生かすことができる。これは高学年だから、これでもいいと思いますけれども、若干そういう差がひっかかった部分があります。

ステップ1で目当てがあって、活動例があって、それを振り返ると、そういうきちんとした流れがある。東京書籍の方が明確に学習の進め方を示していると思います。それから、判が大きい分だけ手元の写真が大きくて見やすいとも思いました。安全面については、両方ともしっかり配慮されているというところがあって、本当にはっきりしないですけれども、先ほどありました情報量が多いというのは、資料集的な扱いでいけば、別にあってもいいという思いがありました。それから、大きさとしては、計ってみたら30グラムから35グラムぐらい東京書籍が重かったです。週1回しか使わないということで、大きめのタイプにでも、そんなに影響もしないと思いました。私の考えとしては東京書籍となりました。

○古川教育長

ありがとうございます。

○山口委員

皆さんのお話がありましたように、目標・目的などを考えると、どちらも遜色がなく、甲乙つけがたいというのが二つの教科書の印象です。教科書サイズが大分違いますから、私は小さいほうの開隆堂を推薦いたします、東京書籍は、教科書が大きく情報量も多いです。フォントサイズも大小さまざま、開いたときに圧迫感を感じました。

一方の開隆堂は、教科書サイズが小さいため、調理や裁縫など、机の上で作業を行うときに、子どもたちが扱いやすいかと思いました。東京書籍に比べると、資料集や情報量は大分少なくなりますが、家庭科は基本的に体験を通して学ぶものだと、私自身は考えます。実際に自分の目で見ると、手を動かしてみる、においや味、手ざわりを感じてみるなど、実際の生活に即した学習ができるような時間的な余裕があるように、すっきりまとまっている開隆堂を私は推薦いたします。

○古川教育長

ありがとうございました。

私も開隆堂がよいと思いました。巻頭に載っている家庭科学習の進め方、これは課題解決的な学習について、わかりやすく説明していると思いました。次のページの安全について注意喚起をしている点がすごく大事と思いました。題材の初めのページに学習の目当てが書いているのもわかりやすいと思いました。あと、ソーイングは見開きのページで、玉結びと玉どめの手順が左から右に流れるように書いてあります。同じように実は整理整頓も見開きのページで左から右に、そしてご飯とみそ汁のつくり方も、見開きで左から右に流れるように、一貫していますので、一目見て、流れがわかりやすいです。それから、決め手としては、巻末にきき手によるはさみや包丁の使い方の違いが一覧によって載っています。これは右きき、左ききのそういう多様性を非常に考えていると思い、そういう点で開隆堂を選びました。

○三町委員

私は、左ききですから、左ききにも配慮しているという、教育長の最後の言葉が心にぐさっと来しました。

あえてこだわったのは、情報量が多いからだめということではないと感じたものですから、今、お話を聞いていて、開隆堂で子どもたちが学ぶことというのは、大変よいと感じましたので、開隆堂で進めていただけたらと思います。

○古川教育長

ほかの委員の方は何かご意見等は、よろしいですか。

ーなしの声ありー

○古川教育長

それでは、家庭科は、開隆堂出版が妥当かと存じますが、よろしいでしょうか。

ー異議なしの声ありー

○古川教育長

次に、保健に移ります。

保健について、事務局から説明をお願いいたします。

○国富教育指導担当部長

保健が含まれます体育につきましては、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見つけ、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することが目標に示されています。

また、体育を通して育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力」等の三つの柱で整理しています。育成する資質・能力の具体的な目標は、「知識及び技能」については、特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身につけるようにすること、「思考力、判断力、表現力等」については、運動や健康についての自己の課題を見つけ、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養うこと、「学びに向かう力」等については、運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養うこととでございます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、保健の協議に入ります。保健につきましては、発行者5者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新しい保健」、大日本図書が「たのしい保健」、文教社が「わたしたちの保健」、光文書院が「小学保健」、学研教育みらいが「みんな保健」となっております。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたか発言をお願いいたします。

○三町委員

5者ということで、1者に絞り込むことはできなかったもので、ポイント制で二つということで行きたいと思います。調べたところ、課題を見つけ、解決過程を通してということですから、教科書の編集もそういう問題解決的なつくりになっている。どこの教科書もそうですけれども、その中身を評価してみたということが大きく1点です。

それから、2点目は、体の変化の内容として小学4年生での扱い。また、これは5年生ですが、心のほうの扱いがどうなっているのか、そういう視点です。報告書の中の記述、その中で見たものについて絞り込んでいきました。

その中で二つに絞り込んだのが光文と学研です。それぞれ特徴があって、学習の進め方ですけれども、学研が振り返り、気づき、考え、調べ、話し合う、まとめる、深める、発表する、そういう一連の活動がどの単元にも意図的に位置づけられていて、一番学習として進めやすいと思いました。そういうところでは東書も一貫性をもっていると思います。この場合は学研が一番いいと思いました。それから、次に振り返って課題を見つけて調べて考えて、それからやってみる、話し合うとか、そういう流れでつくられていること。それから、学習のまとめ、振り返りのところのチェックの仕方がこれも学研か、光文と思いました。大日本もまとめのところは私としてはいい評価をしています。

内容的には、体の変化にかかわるところでは、自分が扱うとしたらどこがいいかと思ったのは、文教社、光文、それから学研、特に体験談についての内容、そこが気持ちのところまで、どういう気持ちだったか、単なる事実として感想で言わせる、気持ちも込めて触れているというのはいいことだと思いました。そう評価を思ったので比重がつけました。

あと、心の扱いが、保健の指導全体で5、6年生、16時間だったと思いますが、基本的に8時間、その中の5年生の大体4時間分ぐらいになると思います。単元構成を見ると、心の部分の扱いが東書と大日本は少ないという感じがしました。学研が単元から見ると4時間扱いだということで、はっきりわかるのは文教社でした。登場キャラクターがいいとか、それもありませんけれども、そのほか、左のページ、スポーツの楽しさというようなところでの学研、そういったところでトータルしてその2者ということでした。

○古川教育長

ほかの委員の方、いかがでしょうか。

○森井教育長職務代理者

保健の学習指導要領の改訂のポイントとして、1、自己の健康の保持増進や回復等に関する内容の明確化、2、心の健康、けがの防止の内容の改善、3、運動領域との一層の関連を図った内容等の改善が示されています。

教科用図書審議委員会からの報告によると、5者ともそれぞれに児童の興味・関心を引く工夫がなされています。その中で私は光文書院と学研の教科書がいいのではないかと思います。

光文書院の教科書は、巻頭で、どうして保健の学習をするのかが掲載されており、アスリートによる体験談を通して、健康で安全に過ごすことの大切さを示しています。単元冒頭の4コマ漫画は児童にこれから学ぶことの導入として大変効果的であると思います。また、三町委員もおっしゃっていた4年の体の変化や5年の心の健康では、具体的に不安や悩みへの対処法を示しており、けがや病気、また自然災害から身を守るための方法も取り上げています。単元ごとのさらに広げよう、深めようや、学習のまとめがあることで、学習の定着と発展につながると思います。

学研の教科書では、巻頭に「健康ってどんなこと」と、児童に健康の意味を問うとともに、スポーツに親しむことを推進しています。保健の学習の1時間の進め方を提示し、一つの単元は見開き1ページになっており、学習を進めるには効率的であると思います。単元の中には、「つかむ」「考える・調べる」「まとめる・深める」という流れで構成されており、児童にとって授業の流れがわかりやすいことと、まとめや深める、つなげるという部分に書き込むスペースが多いことで、児童に自分の考えをまとめ、書かせ、学んだことをしっかりと自分のものにするができるような工夫がなされていると思います。また、先ほどと同様に、4年の体の発育と発達、5年の心の健康は、なかなか相談しにくい心と体の変化に対する単元ですが、体験談を通して児童の立場に立った対処法で丁寧に取り組まれており、不安や悩みを抱えたときに、誰もが経験することで、話し合ったり、周りの人に相談したりするのだという大切なことを学べるようになってきていること。また、5年のけがの防止では、犯罪や自然災害、またインターネットトラブルなどの安全に関する内容も充実していることなど、今日的な課題に触れられている点も優れていると思います。

以上のことから、私としては、光文書院と学研の教科書が甲乙つけがたく、どちらも推薦したいと思います。

○古川教育長

ありがとうございます。

ほかの委員の方、いかがでしょうか。

○高槻委員

どの教科書も初めに体と心の関係ということで、悩みを解決するような記述があって、時代を

感じました。今はこういうことも教科書に載せるのかという感想を持ちました。恐らく、小学生でもそのような悩みを持つということは、いじめ問題とか、学校に行けなくなる問題とかとリンクしているので、保健でも取り上げるけれども、これは道徳などと有機的につながって初めて効果を持つものだろうと思います。小学生に性の問題とか、本当の意味での心の悩みの問題というのも多く、教室で全員に教えるというのは、なかなか難しいと思いますけれども、体の問題を割と淡々と書くような書き方がしてあって、何となくそういうことも学んでおいてもらうという感じだと思いました。

読んで視覚的なことも含めて、子どもにとってわかりやすいだろうと思ったのは、光文書院と文教社で、その二つがいいと思いました。

○古川教育長

ありがとうございました。

○山口委員

この科目は学習範囲に非常に広がりがあり、資料の引用も広いので、本を開いてみたときに、全体的なバランス、視点の導線などから、子どもたちが興味を持って学べる構成かどうかを重視して選びました。出ている教科書の中には、情報量が豊富ですが、単元によっては資料などが広がり過ぎていて、単元の目的自体がぼやけている印象を受けるようなものもありました。また、資料が非常に多数引用されていますので、フォントが大小まじっていたり、視点の導線があちこちに振られていたり、少し目で追うのが難しいと感じるような教科書もありました。

そういったことを踏まえまして、私は光文書院を推薦いたします。重さ、構成、資料、イラスト、文字量のバランスが全体的によく、すっと入ってくる印象を受けました。また、森井委員からお話がありましたが、基本的に見開き1ページで1時間というような構成がすっきりしていていいと思いました。

学研の教科書もバランスはいいと感じましたが、光文書院に比べると、若干情報量が重たいという印象を個人的には受けました。以上のことから、一番目に光文書院、二番目に学研を推薦いたします。

○古川教育長

私は、身近な生活における健康、安全について理解をするという観点で検討いたしました。まず、第一に学研教育みらいの「みんなの保健」がよいと思いました。1時間の学習の進め方がつかむ、考える、調べる、まとめる、深めるという流れで構成されていて、見通しをもって学習することができると思いました。また、アンケートやチェック票があり、日常の生活を振り返られるようになっています。登場するキャラクターの言葉が適切で、子どもたちが考えるヒントになると感じました。また、比較している写真やイラストが大きくて見やすいです。また、文字のフォントも大きくて見やすいと思いました。

次に、光文書院の「小学保健」がよいと思いました。巻頭にオリンピックとかパラリンピックのメッセージがあり、子どもたちの興味・関心を高めてくれると思いました。また、単元の冒頭に4コマ漫画がついていて、親しみやすいと思いました。あと、学習課題が提示されているので、何を考えたり調べたりするのか、よくわかります。また、写真やイラスト、グラフが多いので、比較するのに活用しやすいと思いました。広げよう、深めようの発展学習もよいと思いました。そして、一番いいと思ったのは、がんの学習について、グラフによりがんの死亡率が今一番高いということがわかるようになっていきます。また、年代によって、どのがんの検診をすればいいのかと示されているので、予防医学の面ではとても大切だと思いました。

それで、学研と光文を選びました。

○高槻委員

光文が一番といいと思っています。

○古川教育長

わかりました。

それでは、保健については、光文書院と学研教育みらいが、妥当かと存じますが、よろしいでしょうか。

— 異議なしの声あり —

○古川教育長

この2者にしたいと思います。

次に、英語に移ります。

英語について、事務局から説明をお願いします。

○国富教育指導担当部長

それでは、新たに導入されます外国語につきましては、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することが目標に示されています。

また、外国語を通して育成を目指す資質・能力を、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力」等の三つの柱で整理しています。育成する資質・能力の具体的な目標は、「知識及び技能」については、外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語の違いに気づき、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くこと、なれ親しむこと、話すことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身につけること、「思考力、判断力、表現力等」については、目的や場面、状況等に応じ

て身近で簡単な事柄について聞いたり、話したりするとともに、外国語の語彙や基本的な表現を推測するなどして自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養うこと、「学びに向かう力等」については、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養うこととさせていただきます。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、外国語の協議に入ります。英語につきましては、発行者7者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「NEW HORIZON Elementary English Course」、開隆堂出版が「Junior Sunshine」、学校図書が「JUNIOR TOTAL ENGLISH」、三省堂が「CROWN Jr.」、教育出版が「ONE WORLD Smiles」、光村図書出版が「Here We Go!」、新興出版社啓林館が「Blue Sky elementary」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたか発言をお願いいたします。

○高槻委員

読んで、一番困ったのは英語でした。どの教科書を読んでも、これは自分が子どもだったら勉強ができないだろうと思いました。いきなり、会話が出てきて、単語の意味も説明がなければ、文法も何も書いてありません。一つぐらいまともなものがあるかと思ったら、全部だめです。それで選びようがなくて困り、何回か繰り返し見ました。そうしている時に、テレビのニュースで三単現表現の「He walks」のように、sをつけることが大学生か高校生で正答率が30%だと報じていました。それに対して、昔、NHKの教育テレビの英会話の先生だった鳥飼玖美子さんが、教科書が間違っていると言っていたので、納得しました。その理由はこういう教科書で教えようとするからだと思いました。文法はやはり必要です。恐らく我々このころの文法偏重の反動で、文法がなくても会話ができればいいと言う背景から、そうなったと思います。しかし、これは明らかに行き過ぎで、教科書というのは、春休みになって、子どもが教科書を見て、今度どんなことを学ぶのかとか、夏休みに読み返すとか、自分で勉強できるというのが最低限の条件だと思います。英語の教科書にそれを満たしているものはありませんでした。

後は先生の力量次第ですが、教育出版は実質資料集のようで、何も解説がありません。ほかのは、情報過多で、いきなり難しい文章が出てきて説明がありません。それに、ヘボン式のローマ字が出てくるのですが、その説明も中途半端で、どの教科書を使うにしても、先生の力量がなければ、子どもは当惑すると思いました。

もう一つの感想は、算数は大体どれでもいいような感じでした。国語は違いがあるけれども、それなりによくできていて、こちら側が迷うような感じでした。それから、理科もそうです。どうも教科書をつくる出版社が横並びというのがあって、英語の場合は、総じて不出来です。そういう印象を強く受けたので困りましたが、強いてその中で何とかというのが教育出版と学校

図書です。それでも、難しくて、子どもはわからないだろうと思いました。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方、いかがでしょうか。

○三町委員

高槻委員の話を聞いていて、昔の私が中学校時代に習っていたような英語のイメージが浮かんできました。基本的に小学校は、中学年から外国語活動が行われて、その流れから、話す、聞くを中心に学んだものが展開していくというのが小学校、これからの実質上の英語だと理解しています。

そういう流れの中で各時間の中で、どの授業を組み立てていくか、これが明確に出ている教科書が大事だというのが、まず一つです。そのほかに、資料の豊富さなど多々ありますけれども、そういう意味で、私は悩みました。

これもまたポイント制で、結果として教育出版と光村の2者を選びました。それぞれいいところがあって、4年生からの流れを意識して、ちゃんをつくっている教科書もあれば、外国語活動からのつなぎをしているというのもあります。例えば、見開きで授業をつくり上げるとか、1単位の時間の中を聞く、話す、読む、書く流れを、45分を使いながら力をつけていく、そういう授業の構成の仕方、それから報告書にもありますが、C a n D o、何ができるようになるのか、何ができるようになったかというのをチェックがちゃんとできるなどバランスを見ていて、教育出版と光村のどちらがということではなくて、二つ選びました。

○古川教育長

ほかの委員の方、いかがでしょうか。

○山口委員

事務局から先ほど説明がありましたが、平たく簡単に、小学校で英語を教科化する目的を再度確認しなければならないと思いました。具体的には、皆さんのお話にあるように、従来の中学校から高校英語の内容の定着を図るために学習開始を早めるのか、いわゆる偏差値対策、試験対策に重点を置いた学習のための小学校英語導入なのか、もしくは児童たちが大人になったときの社会情勢を見越して、実際に話す、使いこなす体験を増やすための小学校英語導入なのかという点です。

私個人といたしましては、小学校英語は後者、つまり英語で話す、使いこなす体験を増やすことが小学校英語の目的で、それによって、その後、長く続く英語学習に対して自信や意欲の土台を育てていくことが必要であろうと考えております。

そういった視点から見ると、私の場合は明らかに一つだけいいと思ったものがあります。私は、

学校図書を推薦いたします。言語習得の手順は、聞く、話す、読む、書くです。従来の英語教育や、ほかの教科書が読んだり書いたりすることに重点を置いているのに対し、学校図書は、聞く、話すに重点を置いています。ここで英語の音に親しむ、自分の話した英語が通じる体験を多くしておく、将来的に英語に抵抗を持つ子どもたちが少なくなるのではと感じました。

教科書全体として、文字が少ない、難易度が高い部分があるなど報告書や先生方からの指摘はあり、その点において比較しますと、学校図書よりも優れていると私自身が感じた教科書は、ほかにもありました。しかし、聞くこと、話すことに最も重点を置いている教科書が学校図書だと感じましたので、今回、私は、あえてこちらを推薦させていただきます。

先生方の中には、ご自身が英語を発すること自体、抵抗をお持ちの方もまだまだ多いと思いますが、音声メディアやALT、ボランティアさんの力を積極的に活用して、子どもたちと一緒に英語を使って英語学習を楽しんでいけるような授業を展開していただければいいと思います。

ほかの教科書を見ましたが、やはり、中学校英語の先取りで、文法が先行してしまい難易度が高いです。これではドロップアウトして、小学校のうちに英語に苦手意識を持つ子どもが増える印象を受けましたので、私は学校図書を推薦いたします。

○古川教育長

ありがとうございました。

○森井教育長職務代理者

英語の学習指導要領のポイントとして、高学年から発達の段階に応じて、文字を読むこと、書くことを加えて、総合的・系統的に扱う学習であることと、中学校への接続を図ることが重視されていることです。

各社ともに音声に十分になれ親しませたり、文字には名称と音があることに気づかせるための活動としてのチャンツや歌が設定されていたり、言語活動に必要な語彙や表現等を定着させるための活動としてゲームが設定されています。

東京都教育委員会の調査研究資料の中の「書くこと」の中で、先ほど、三町委員もおっしゃっていましたが、4線の配慮として各社とも2本目と3本目の幅が広がっていて、フォントにおいてもユニバーサルデザインを使用しているとのことに、児童への配慮を感じました。

図書館で実施したアンケートでは、子どもたちに英語を好きになってもらえるような、また、楽しく学習できる教科書を望む意見が多く寄せられており、その観点で審議委員会の報告書を見ると、難易度が高いと評価される教科書は候補としてふさわしくないと感じました。

また、書く学習を進めるために必要なアルファベット表やカード、ローマ字表を掲載しているかどうか。そして何より児童が見通しをもって主体的に授業を進めやすい構成になっているかという点を総合して、私としては教育出版、そして光村図書の教科書がいいのではないかと思います。2者とも挿絵や写真が見やすく、1ページの分量が余白を含めて、すっきりしたつくり

なっています。外国語を用いたコミュニケーション能力が問われている中、中学年での「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動で、なれ親しんできた外国語学習を、高学年ではさらに「読むこと」「書くこと」につなげていき、さらに中学校への円滑な接続をしっかりと意識した内容であることが重要です。

先ほど、高槻委員もおっしゃった、先日、中学生の基本的な文法の習得について気になる報道がありました。会話重視の外国語活動について、その学習の仕方を見直すことが求められています。そういう意味からも2者の教科書は、進級、進学後に生かせる、子どもたちが意欲を持ち続けられるような学習内容と、教員にとって指導しやすい教科書であると考えます。

○古川教育長

ありがとうございました。

私は、学習指導要領にある、「聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通してコミュニケーションを図る基盤となる資質・能力を育成することを目指す」という目標に活用しやすいものはどれかということで検討いたしました。その結果、私は教育出版がよいと思います。教育出版は、最初に1年間の学習目標が載っていて、見通しをもって学習することができます。それと、Start togetherは英語に親しむことができると思いました。また、イラストや写真が多く、わかりやすいと思いました。単元の終わりに振り返りがついていて、自己評価することができる、巻末のMy word bankが学習するときの手助けになると思いました。また、活動用のシールやワークシートもついているので、これも活用しやすい、途中にある名所・名物マップというのがあるのですが、これは日本を外国の方に紹介するときに非常に役に立つと思いました。ただ、紙が少しざらざらしているのが気になりました。

○高槻委員

英語の勉強において文法を学ぶことは、受験勉強の準備を始めるということではなくて、文科省の背景は、日本の英語教育は見直さないといけないと考えているということです。日本では6年も英語を勉強しているのに、ほとんどしゃべれない。アジア各国のいわゆる開発途上国でも3年でしゃべれるようになる。これは問題だと会話重視の流れがあったのです。中学生では遅い。もっと頭のやわらかいときから英語に親しんだほうが良いというわけです。だから、理念は間違っていない。ただ、私は英会話が大好きですけども、この教科書を読んで英語が好きにはとてなれないと思いました。

○三町委員

その論点とはまた別ですけども、森井委員からお話があったのですけれども、私も報告書を読ませてもらって、報告書の中で難易度が高いということで書かれているのは東京書籍と学校図書、三省堂でした。この意味合いを調べていただいているのが小平の先生方で、そこから上がってきたものを精査して、あの表現にしているということは、小平で使うにはいかがかという意味

合いが含まれていると私は理解しました。したがって、東京書籍と学校図書と三省堂は使わない考えを持っています。そういう意味での議論は山口委員としたいと思いますが、検討する必要があるのか、ないのかということを含めて、例えば、学校図書を残すならば、本当にそのことそのものが必要かどうかをここで議論していただけたらと思います。

○古川教育長

山口委員、いかがでしょうか。小平の先生方が感じている難易度というものをどのように捉えますか。

○山口委員

先生方が、現在指導しやすい、先生方の視点で指導しやすいと感じたのは、私は教育出版でした。シールやワークシートがたくさんありますし、扱われている題材や巻末のカードの分量、全体の構成など、すっきり配置されていて、先生方はなれ親しんだ英語を指導しやすいのかという気がいたしました。ただ、先生方がなれ親しんできた英語が高槻委員のおっしゃった6年間頑張ってもしゃべれない英語だったということで、転換を図るためにも、先生方たちには抵抗があり、受け入れられないだろうということを見越した上での学校図書の推薦でした。なので、先生たちが本当に指導しやすい、やり慣れているということを考えれば、教育出版という気はしています。ただ、英語学習の方向性はスイッチしてあげたいという気持ちが私の中には強くありますので、学校図書を推薦させていただきたいと考えております。

○古川教育長

高槻委員、いかがでしょうか。

○高槻委員

私は学校図書を見て、これは難しいと思いました。私だったら教えられないと思いました。

○古川教育長

三町委員、いかがでしょうか。

○三町委員

教科によって、これまでの指導法や転換しなければいけないという教科があるし、それに沿って教科書は変えてきているわけです。どの教科もそうですし、その中で、さっきの例で言うと、算数のように、より問題解決的な授業ということで教科書の編集も変わってきていて、その教科書で昔のように教えることが絶対できない教科書になっている。それがいいのか悪いのかという議論で、過去のイメージの先生だったらそれは使いにくい、でも、今の考え方で、きちんと指導を勉強するべきだということであれば、それは構いません。検討する必要があるけれども、ただ、

この場合の難易度が高いという意味合いを、私はそうではないと理解をしていて、小平の子どもたちの実態に即して難易度が高いと言っていると理解しています。ですから、そこをどう捉えるか、どう捉えてあげるかということが大事だと思います。したがって、私は、学校図書は検討すべきではないと考えています。

○古川教育長

森井委員、いかがでしょうか。

○森井教育長職務代理

私も三町委員と同様の意見で、教科としての英語は教科書も来年度から新たに使い始めるものであるので、試行錯誤というところがもちろんあるのかもしれませんが、市民の方のご意見にもあったように、難しく、小学校時点で英語が余り好きでなくなるような難易度が高いというような評価を先生方からいただいている教科書を使うこと、小学校で学ぶ英語が大人になってしゃべれるようになるまでつなげるためには、小学校の時点では先生方が指導しやすく、子どもたちも楽しく学習できることが第一であり、そこから「読む」「話す」、そして「書く」ことにつなげて、中学校につなぐことが大切であると思います。その最初の段階の教科書としては、まず、先生方の指導がしやすく、子どもたちが楽しんで学習ができる教科書を、私としても小平市の子どもたちのために選んであげたいと思っています。

○古川教育長

という意見が多いようですが、山口委員、いかがでしょうか。

○山口委員

難易度が高いというのは、これは先生方、大人たちの立場で難易度が高いと感じています。音や感覚から入る視点を学校図書は重視しておりますので、さまざまなメディアやいろんな情報を受けている子どもたちにとっては、むしろそちらのほうが入りやすいのかと思います。ただ、指導をする先生方からすると、なじみが少ないので、難易度が高いというのは大人側の視点ではないのかというのが1点になります。

あと、小平市の子どもたちのためにつけてあげたい力というのを考えると、英語を書くとか単語を覚えるとか、そういうことよりも、先にたくさん聞いて、たくさんしゃべる活動を授業中にするというようなことを授業の中に展開してあげたいと思いました。私はやはり学校図書を、も一度検討していただけたらうれしいと思います。

○古川教育長

森井委員いかがでしょうか。

○森井教育長職務代理

難易度が高いという評価は、審議委員会の報告の中の児童の興味・関心、発達の段階に即した内容であるかという観点において、難易度が高いという所見が示されています。必ずしも教員の方の目線ではなく、小平市の子どもたちが学習するにあたって、この内容であると難易度が高いのではないかという判断が出されているのであれば、検討する必要はないのではないかと考えます。

○高槻委員

私も難しいと言ったのは、教えるのが難しいというのももちろんあるけれども、子どもにとっても難しいということです。子どもが自分で勉強するのに、これだと何にも解説もないので、いきなり英語が書いてあるので、子どもにとって難しいと思います。

○古川教育長

教員も教えるのが大変だけれども、子どもたちも理解するのがなかなか大変だと私も現場を見ていて思います。

よろしいでしょうか。

○山口委員

はい、大丈夫です。

○古川教育長

英語については、教育出版と光村図書出版の2者を残すということでよろしいでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

それでは、最後になります。

道徳について、事務局から説明をお願いします。

○国富教育指導担当部長

特別の教科道徳につきましては、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解をもとに、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを高める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることが目標として示されています。

特別な教科道徳に改正されたことで、いじめの問題への対応や発達段階を一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容への改善、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を

図ることが示されています。

○古川教育長

ありがとうございました。

それでは、道徳の協議に入ります。道徳につきましては、発行者8者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新訂 新しい道徳」、学校図書が「かがやけみらい 小学校道徳」、教育出版が「小学道徳」、光村図書出版が「道徳」、日本文教出版が「小学道徳 生きる力」、光文書院が「小学道徳 ゆたかな心」、学研教育みらいが「新・みんなの道徳」、廣済堂あかつきが「みんなで考え、話し合う小学生の道徳」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたか発言をお願いいたします。

○森井教育長職務代理者

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする道徳科は、従前の道徳的な諸価値についての理解をもとに、「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習活動を具体化して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と改められています。また、よりよく生きていくための資質・能力を培うという趣旨を明確に示しています。

読み物を読んだり、場面を演じ合ったりすることで、自分の心の考えを持ち、それらを書いたり話し合ったりするといった、より具体的な学習活動が特徴で、現代における社会問題に触れ、自分自身の生き方を振り返り、人権や規範意識の醸成を図ることにつなげていくことも大切です。

従前より四つの視点を自分に関すること、人とのかかわり、集団や社会とのかかわり、そして生命や自然、崇高なものとのかかわりと順序を改めたことにより、児童にとっての対象の広がりがより明確になったことも示されています。

東京都教育委員会の教科書調査研究資料では、四つの領域の教材の数がバランスよく扱われているのは、学校図書、教育出版、光文書院、そして学研です。また、情報モラルや現代的な課題を取り扱っている教材については日文が最も多く、学研、光文と続きます。また、先人の伝記等が取り上げられている教材数では、学校図書、教育図書、学研の順となっています。疑似体験的な表現活動を取り入れた学習が多く扱われているのは教育出版と光村図書となります。この項目だけに着目すると、教育図書、学研が求められる教材を多く扱っている点では採択にふさわしい教科書であると言えます。

さらに、教科用図書審議委員会からの調査報告を見させていただき、どの出版社の教科書も学習指導要領に基づき内容が正確、かつ公正であるとしながらも、児童の発達の段階に応じた分量であるか、また、記号や写真などのわかりやすさや見やすさ、教科書の大きさが児童の学習活動に適したものであるか等についての点で評価の分かれるところであるとの感想を持ちました。

そして、前回の教科書採択同様、別にノートがついているかどうかとも児童の学習活動にとって、また、そのノートを使用することでの教員の指導の仕方についても意見が分かれるところです。

教材の「始め」や教材中の吹き出しに発問が示されていることについても、児童にとっては教材に入り込むきっかけとなり、授業の流れをつくる助けになる反面、教員にとって考えさせたい問題が制限される可能性もあり、ノートのとり方を含め、学習の仕方について教員の工夫が必要となることは言うまでもありません。

そして、実際、各社の教科書を見せていただき、まずは児童にとってわかりやすく見やすい教科書であるかとの観点では、各社ともカラーユニバーサルデザインに配慮されているなど、児童に優しい色合いや書体に工夫が見られました。また、教材にふさわしい挿絵が使われており、児童が学習を進めていく中でイメージを膨らませることができるものが多く、私もわくわくする思いで読ませていただきました。ただ、挿絵が多過ぎるものや大き過ぎるものは特に低学年の児童にとって学習に集中しづらい状況をつくってしまうのではないかと心配もあります。

各社ともに3年、もしくは4年の教材として扱っているものの中に「ブラッドレーの請求書」、発行者によっては「お母さんの請求書」があります。自己有用感を高めることや、自分が家族の一員としてこれから何ができるのかを考えさせる教材です。しかし、3年で扱うと、家族としてできることに発展性が薄い印象で、4年で扱っている場合も主人公の少年と母親の気持ちを考えるだけの学習になっている教科書もあり、教科書の設問の設定だけでは教材が有効に使われづらいと感じるものもありました。

図書館で市民の皆様からいただいたアンケートの中で、肯定的なご意見が多く寄せられていた光村図書ですが、審議委員会からの調査報告では、奇数ページから始まる教材が多数あることで、前の教材の情報が目に入るとの報告がありました。しかし、ほかの教科書でも奇数ページから始まる教材はあることや光村図書に関する報告の中で取り上げられている教材は、児童にとってもわかりやすく、興味・関心を引く内容であるという点、また、最後のページに該当の学年の児童に学ばせたいこと、そして現代的な他教科課題等とのかかわりや、他教科、領域とのかかわりが示されていることで、教員にとっても指導する上で助けになるのではないかとこの点を考慮し、光村図書の教科書を候補としたいと思います。

また、東京書籍の教科書も審議委員会の報告により、内容、構成上の工夫とも大変バランスのよい教科書であると感じました。教科面と主題が初めに記載されており、さらに発問があることにより、児童が授業に入りやすいよう工夫されていること。挿絵や写真が鮮明で見やすいことなどが挙げられていますが、低学年では児童に考えさせたいことが題名の下に示されている「はじめに」だけなので、教員にとっては経験や力量が必要になるのではないかと感じました。

他社の教科書も内容や学習の見通しなどの見方など、甲乙つけがたいところではありますが、私としては、どの学年にとっても扱いやすい大きさであることも考慮し、光村図書出版、東京書籍の教科書がふさわしいのではないかと考えます。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方、いかがでしょうか。

○三町委員

私は二つに絞り切れなくて、結論だけ言いますと、東書と学校図書と光村の三つまでをとりあえず絞り込んだというところです。

その観点としては、今ありましたように、考えて話し合うという、道徳教科化の中で特にうたわれているわけですが、そういう中で、考える、何のため、あるいは狙いを述べる。そういったところで扱いとして、題材冒頭の扱いがどうなっているか、目当てを示しているもの、示していないもの、あるいは示しているのが、例えば、光村では「心」という書き出しや、東書では逆でない、そういうところで各社ばらばらですが、その中でそれぞれの特徴を見てきました。

それから、その中で児童向けの内容項目をはっきりと書いているか。どういうことについて勉強しますとキーワードで、例えば勇気だとか、そういうキーワードでわかるようになっていくか、わかりやすさはしっかりしたほうがいいので、その3者はちゃんとしていると思いました。

それから、題材の最後の振り返りの部分ですが、大体多くは二つぐらいに絞られています。東京書籍は1年生が全くなしで、先生がその中で投げかけていく感じですが、基本的には二つの段階で登場人物の考えだとか、気持ち、そして、あなたはどうしますかみたいな形の問いかけ。東書や日文、光文、学研もそうでしたけれども、光村だけが3段階です。だから、国語的というようなものも感じることは感じるのですが、それは教師側で問いかけを工夫することで済む内容だと思います。さらに発展させて考えさせようというような質問にもなっているので、いいと思いました。

ノートについても、前回、あえてノートは要らないと思っていたのですが、例えば、日文のノートというのは、改めて見ると、子どもに普通のノート与えて、質問を書かせれば、それで済むノートなので、あえて必要ないと思いました。なぜ、こんなをつけているのかというのが、それから、あかつきの場合は、昔と配列とかが違っているということ。それから、1題材に対して1項目になっていないので、どう使うかと教師側が悩み、子どもも困るのではないかということでマイナスしました。学校図書の場合は、そういう意味では自分のノートプラスアルファとして、内容的にはいいということで、今回はノートがあっても、私としてはよしとしました。

それから、いじめだとか、現代的な課題ということを明確に示していくという意味では、目次に、いじめということをはっきりと出ている東京書籍、光村、日文も出ています。それから、現代的な課題の情報モラルに関するところが、アイコンとしてはっきり、こういうことが課題だとわかるということも、3者挙げたところでは見えますけれども、光村は余り目次からは見えませんでした。

それから、学習記録や振り返りというところでは、東書は学期ごとに巻末に、学期ぐらいの単位でまとめています。それは最後に先生が見て、そこからまたさらに広げて評価するというところでいいという扱いだし、学校図書はノートの目次の下にそういう大体2回分ぐらいの振り返りと

いうことになっています。それから、光村は学期ごとと1年間というくりで、子どもにとっていいのかなと思います。また、それを先生が見て、通知表の考えでも毎学期は書かないでしょうから、そういう意味ではいいということで、三つに絞ったということでございます。

○古川教育長

ありがとうございました。

ほかの委員の方はいかがですか。

○山口委員

道徳は心を育てる教材だと解釈しております。考えるべきこと、着眼すべきことなど、べきが強調され過ぎている教科書は、余り好ましくないと考えました。

先生方や各種報告書にありますように、ページの中ですとか、ページの下段のこういうことについて考えてみようとか、このときどう思ったかという発問がたくさん書いてある教科書がありました。これは指導書の先生のほうに書いてあればいいことで、教科書に載せてしまうと、子どもの発想を誘導してしまい、気が散るという印象を受けました。

また、ずっと話が出ております学校図書の別冊のノートですが、自分の考えなど頻繁に書き込ませるとするのは、いいと思ったのですが、細かくリードし過ぎ、誘導し過ぎという感がありました。道徳はもっと自由度があるべきと思いました。さらに、学校図書は下のページが透けて見えるので、子どもたちには見づらいと思いました。

あと、日文は、別冊ノートがあるのですけれども、これは三町委員が話していたように、ただ、もう白い書くスペースだけが確保されている。これが別冊ノートとしてつく必要があるのかどうか、子どもたちの実態に合わせて先生が適宜ノートを用意する、プリントなどに書かせるなどすると、いいのかと感じました。

以上の点から、私が推薦いたしますのは、東京書籍です。表紙、中の挿絵、紙質、扱われているストーリーなど全体的に非常に優しい印象を持ちました。また、学校の先生方からも非常に好意的な評価が多かったように思っています。大きさは変形版でどうかと感じますが、全体的に見ると、バランスがいいと感じました。先生方から、文字量が多いとの指摘があり、確かに私自身もそう感じる部分はありました。ストーリーもクラスで共有して、登場人物の心情を読み取る作業は、国語の授業との差別化がポイントになってくるかと思います。授業の目的をしっかりと設定し、目の前の子どもたちの実情も踏まえながら、先生方が創造的に授業展開してくれることを期待しております。

一番が東京書籍ですが、本当に僅差で光村を二番目に推薦します。光村も全体的なバランスがいいと思いました。三町委員の話にもありました。資料から考えよう、話し合おう、つなげるのステップがいいと思いましたが、東京書籍よりも、もっと国語的な発問が多いというのが気になりました。国語の教科書なのかという印象を持つぐらいでした。あと、話にありましたページレイアウト、奇数ページから新単元が始まるというのが、私も見にくいと思いましたので、一番が

東京書籍、二番が光村で推薦させていただきます。

○古川教育長

ありがとうございました。

○高槻委員

2年前に発言したのを思い出しました。道徳の教科書を読んでいると、国語の教科書とどう違うのか、それが2年経てば少し差別化されて、国語は言葉を教える、道徳は心を教えるというふうに変わっていくのだろうと期待していました。しかし全然変わっておらず、今回もほとんど国語の教科書とどこが違うのかという感じが強いです。

今の子どもにとっての道徳というものの教えにくさというのは、いくら立派な教科書があっても、日々テレビで流れてくる事件は、非道徳的なことが伝えられるという現実があることです。それを知っておきながら、教科書で昔の英雄の美談や偉人の行為を読むことの先生の教えづらさを想像すると、相当大変だろうと思います。

私は、道徳の中でいろいろ教えるのはいいと思うのですが、人間社会と自然とのよりよいかかわり合いが、どんどん悪くなっているの、それについて取り上げているようなのがどのくらいあるかという視点、それから環境問題、災害の問題などがどのくらい取り上げている、知られているかという視点で見ました。そして、いいとは思ったのが光文書院、その次が東京書籍でした。今後、道徳の教科書というのは国語とはこう違うのだという工夫し、進化することを期待します。今回は光文書院と東京書籍、どちらかというとなら光文書院のほうがいいと思いました。

○古川教育長

ありがとうございました。

私は学習指導要領にある、「児童が多様な感じ方や考え方に接する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育むための言語活動、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習」という観点で検討しました。

まず、第一は東京書籍がよいと思いました。東京書籍は、目次がわかりやすく、いじめに関するものが強調されています。「道徳の学習を進めるために」というところで、考える道徳、議論する道徳を進めようとしているのがわかります。また、話し合いの約束を確認することができるようになっています。あと、教材の長さが適切で、考える時間や議論する時間をしっかり確保することができると思いました。いじめの問題に対応した教材は、直接扱う教材、間接的に扱う教材など、段階を踏んでおり、効果的だと思いました。1、2年の教科書には発問が載っていないので、自由に話し合うことができる。3年以上は発問が2問で、教材に関する発問が1問、自ら振り返る発問が1問となっているのがいいと思いました。あと、巻末にある学習のまとめは簡単に書くことができるようで、無理がなくいいと思いました。ただ、教科書が少し大きいのが気になりました。

次に光村図書出版、ここも目次がとてもわかりやすく、いじめに関するものが強調されていて、また、「演じて考えよう」というのでは、ロールプレイのやり方を説明しており、体験的な学習に取り込みやすいと思いました。あと、挿絵や写真が大きくて鮮明です。教材に関連した本の紹介があり、学びが広がると思いました。学びの記録を毎時間書くようになってはいるのですが、学びの変化など、記録を残すことができると思いました。ただ、教材が少し長いものがあって、考える時間や議論する時間を確保するのが少し難しいと思いました。また、中学年にとっては、字が小さいと感じる教材があるのが気になりました。それから、発問が3問載っています。これも少し多いと思います。あと、一般の方からのアンケートには、おおむね肯定的な意見が多かったのですが、評価に関するページについては心配する声が聞かれたのが少し気になりました。東京書籍が一番、二番が光村です。

高槻委員、光文書院について何かありますか。

○高槻委員

いいえ、そんなに強くというわけではないですので、取り下げていいです。

○古川教育長

よろしいですか。そうすると、東京書籍と光村図書出版、2者を残します。

○三町委員

3者挙げています。

○古川教育長

失礼しました。

学校図書についてはいかがでしょうか。

○三町委員

結構です。とりあえず絞り込みのためになるので、ほぼ同列ですけれども、皆さんのお話の中でも、当初、光村の声が大きいということであれば、その二つでもう一回調べ直したいと思います。

○古川教育長

大変失礼しました。

それでは、東京書籍と光村図書出版が妥当かと存じますが、よろしいでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

ありがとうございました。

以上で、本日の協議を終了いたします。

次回、8月15日に、本日の協議結果に基づきまして、種目ごとに候補を1者に絞り、それらを議案の原案としたいと存じます。

改めて確認させていただきます。

国語は東京書籍と光村図書出版の2者、書写は教育出版、光村図書出版、日本文教出版の3者、社会は日本文教出版1者、地図は帝国書院1者、算数は東京書籍1者、理科は大日本図書、学校図書の2者、生活は東京書籍、学校図書、日本文教出版の3者、音楽は教育芸術社1者、図画工作は日本文教出版1者、家庭は開隆堂出版1者、保健は光文書院、学研教育みらいの2者、英語は教育出版、光村図書出版の2者、道徳は東京書籍、光村図書出版の2者でよろしいでしょうか。

－異議なしの声あり－

○古川教育長

今回は令和元年8月15日木曜日、午後2時から市役所6階、この大会議室で開催いたします。

なお、参集時刻は午後1時30分といたします。

以上で、本日の日程は全て終了いたしました。

これもちまして、教育委員会8月臨時会を閉会いたします。

午後6時28分 閉会